

平成27年度公益財団法人JKA補助事業

教育現場のICT安全安心対策事業 実施報告書

平成28年3月

一般社団法人日本教育情報化振興会



この事業は競輪の補助金を受けて実施したものです。

目次

はじめに..... エラー! ブックマークが定義されていません。

第1章	1
-----------	---

情報モラル指導充実のための事業	1
-----------------------	---

1. 事業の目的	2
2. 作業項目とスケジュール／作業体制	3
3. セミナー開催	6
4. 学習教材開発	16
5. 成果発表会	23
6. まとめ	24

第2章	25
-----------	----

コミュニケーション力育成のための事業	25
--------------------------	----

1. 事業の目的	26
2. 作業項目とスケジュール／作業体制	27
3. セミナー開催	29
4. 学習教材開発	36
5. 成果発表会	37
6. まとめ	38
7. 次年度に向けて 継続とさらなる定着	40

第3章	40
-----------	----

ネットの使いすぎ撲滅のための事業	40
------------------------	----

1. 事業の目的	41
2. 作業項目とスケジュール／作業体制	42
3. 指標作成の経緯	44
4. 「つながり依存」の社会背景	45
5. 学校現場の現状と指導案(指導のポイント)	45
6. 子どもたち、保護者の現状	50
7. 「つながり依存」の識別指標の開発	52
8. 成果発表会	71
9. まとめ	72

第 1 章

情報モラル指導充実のための事業

1. 事業の目的

インターネットは、社会生活の一部となり、買い物や予約申込み等は電話よりもむしろインターネットを利用して行い、インターネット無しでは考えられないというほど、社会生活に浸透している。また、スマートフォンがフィーチャーフォンを上回って普及する現状では、インターネットへの入り口となる端末は、パソコン、携帯電話からスマートフォン、タブレット端末、ゲーム機、音楽プレーヤーのように多様化すると同時に、いつでも、どこでも、誰でもインターネットに接続して、利用できるものとなっており、児童・生徒は保護者の目の届かないところで利用できるようになった。

このように身近になったインターネットであるが、その利用により手軽に多くの情報を入手したり、見知らぬ人々とコミュニケーションを取ったり、自宅での買い物も手軽にできるなど、様々なことが手軽にかつ安全安心にできるようになると同時に、もう一方では児童・生徒が SNS や無料ゲームなどのコミュニティサイトで犯罪などに巻き込まれる事例も発生している。

JAPET&CEC では、児童・生徒の安全安心を願い「教育現場の ICT 安全安心対策事業」を展開しており、この中の一つの事業として「情報モラル指導充実のための事業」を実施している。

これまで、インターネットには危険な面があるということで児童・生徒をそれらから遠ざけるのではなく、子どもたち自身がインターネットを上手に使い、上手に付き合っていけるようにすることが大切であるという考え方に基づいて「親子のためのネット社会の歩き方セミナー」を開催してきた。これは、直接、児童・生徒と保護者に対し、ネット社会をどう歩いていけばよいのかを指導、啓発するセミナーであったが、学習指導要領の総則に「各教科等の指導にあたっては…情報モラルを身につけ…」と記載されたことを契機に、全ての教員が、全ての教科で情報モラル指導をできるように、その指導法、教材や現在児童・生徒の抱えている問題点など最新の情報を提供することを目的として、平成 23 年度から公益財団法人 JKA の補助をいただき、情報モラル指導の講師を育成すべく「情報モラル指導充実のための事業」を行い、教職員や教育委員会の指導主事などを対象としたセミナーを開催して、今年度はその 5 年目にあたる。正しい指導方法を広く展開することを重要な観点として、セミナー参加者がその地域の教育委員会や学校に戻り、そこで講師として指導ができるための教材と指導方法を伝える資料を用意し、裾野を広げるための活動としている。

今年度は、前年度に引き続き、開催地域の広範化を図った。過去 3 年間は、都道府県及び中核市以上の地方自治体の教育委員会へセミナー開催を案内し、申込のあった地域でのみセミナーを開催していた。今年度は、これに加え、JAET（日本教育工学協会）主催の「富山大会」の一セッションとしてワークショップを開催し、富山市、堺市など過去に開催していない地域でもセミナーを開催することができた。

2. 作業項目とスケジュール／作業体制

(1) 作業項目とスケジュール

作業項目とスケジュールは下記の通りである

図表1 作業項目とスケジュール

	平成27年									平成28年		
作業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
委員会開催			▼① 1			▼② 3					▼③ 2	
開催地公募	---▼											
テキスト改訂		▲-----▼										
セミナー開催			▲-----▼									
学習教材開発		▲-----▼										
成果発表会												▼ 4

(2) 委員会の設置

本事業では有識者で構成する「ネット社会の歩き方講師育成セミナー検討委員会」を組織して作業に取り組んだ。全6回の検討委員会を開催し、作業スケジュールの策定、セミナー開催地の公募と採択、セミナー用テキストの改訂、セミナー開催時の講師、学習教材の企画と開発、成果発表会での報告等、本事業の全体を管理した。

また、セミナー用テキストの改訂の実作業、セミナー開催地の教育委員会との連絡、セミナー開催準備、学習教材開発の実作業等は事務局が担当した。

図表2 委員一覧

所属	役職及び氏名
鳴門教育大学大学院	准教授 藤村 裕一
岐阜聖徳学園大学	教授 石原 一彦
東京女子体育大学	准教授 榎本 竜二
環太平洋大学	教授 梶本 佳照
東京都台東区立 浅草小学校	校長 木村 和夫
東京都台東区立 教育支援館	研修専門員 佐久間茂和
千葉学芸高等学校	校長 高橋 邦夫
柏市立中原小学校	校長 西田 光昭
千葉大学教育学部 附属中学校	主幹教諭 三宅 健次

図表3 事務局等の体制

所属	役職及び氏名	役割
一般社団法人 日本教育情報化振興会	専務理事 鶴田 雅文	責任者
同上	調査・研究開発部 部長 吉田 真和	総括
同上	普及促進部 研修担当部長 中沢 研也	研修対応
同上	調査研究開発部 シニアエキスパート 宮原 克彦	連絡窓口
同上	総務部 総務担当部長 赤松伊佐代	JKA 対応

(3) 委員会の開催

委員会は年間で3回の開催とし、適宜日程を調整した。急を要する場合にはメールによる検討・決議を行った。予定通り年間3回の委員会を開催した。
それぞれの開催日、議題は下記の通りである。

図表4 委員会開催実績

開催回数	開催日	議題
第一回	27. 6. 1	・年度スケジュールの確認 ・セミナー開催地採択と担当委員の選定 ・セミナー用テキスト改訂カ所の検討 ・新規開発の学習教材のテーマ検討 ・日本教育工学協会(JAET)大会のワークショップ開催について
第二回	27. 9. 3	・更新するコンテンツについて - 修正の確認及び内容の確定 - ユニット教材執筆者の確定 等 ・日本教育工学協会(JAET)大会のワークショップ発表者確定
第三回	28. 2. 2	・更新するコンテンツについて - 修正の確認及び内容の確定 - 学習教材のシナリオ検討 等

(4) 開催地の公募

開催地の公募は、教育委員会の意向もあり¹前年度の1月より行った。JAPET&CECのWebページで公開すると共に、全国の都道府県と中核市以上の教育委員会約100カ所へ下記内容の案内状を送付した。

1) テーマ

「情報モラル教育指導のポイント」

2) 開催時期と時間

平成27年6月から平成27年12月の間の午後、最低2時間30分

3) 対象受講者と会場あたりの定員

指導主事、教職員 約50名程度(目安)

4) 開催会場

地方自治体等の無償で利用できる会場 かつ 受講者がパソコンを使用可能な会場

5) セミナーの具体的な内容

講師育成セミナー検討委員会と貴教育委員会の協議で決定する

6) セミナーのプログラム(例)

- ・データから見るネット社会の現状
- ・情報モラルの指導(理論編および実践編)
- ・「ネット社会の歩き方」の活用
- ・その他の教材の紹介
- ・保護者との関わり
- ・問題発生時の対応
- ・ワークショップ

¹通常、地方自治体の教育委員会は教員研修計画を前年度の二月頃に策定している。この計画に組み込むために、本事業で実施するセミナーの採択に関しても早期の決定を求められている。

(5) セミナー用テキストの改訂

セミナー用テキストの中には、携帯電話・スマートフォンの保有率やネット上のトラブル発生状況等、年々変化する数値データがあるため、中央省庁が発表している最新データに更新した。

また、スマートフォンを保有する比率が増え、新しいSNSのサービスや問題にも対応する必要があった。このように世の中の動きを反映したセミナーとするために、委員の意見に基づき（過去一年間程度のネット上のトラブルやリスクの中から喫緊の課題と考えられる事案を取り込む）資料の差し替えを行った。

3. セミナー開催

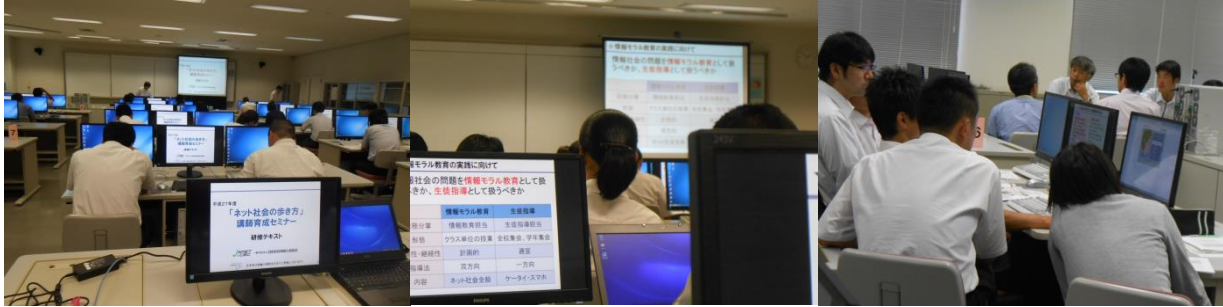
(1) セミナー開催

本事業で提供するセミナーは、全国の教育委員会が主催している教員向け研修会の一プログラムとして実施される場合が多い。この関係で、教員が比較的時間を確保し易い、夏休み期間に開催が集中している。教育委員会の指定が無い場合は以下のプログラムでセミナーを実施することとした。

図表 5 セミナー開催実績

開催回数	開催日	開催場所	講師	人数
第 一回	27. 6. 10	堺市教育委員会	佐久間委員	20 名
第 二回	27. 7. 3	やまぐち総合教育支援センター	三宅 委員	35 名
第 三回	27. 7. 3	和歌山県教育センター 学びの丘	石原 委員	36 名
第 四回	27. 7. 30	鹿児島市立学習情報センター	西田 委員	30 名
第 五回	27. 7. 31	千葉市教育センター	高橋 委員	21 名
第 六回	27. 8. 4	大阪情報専門学校	榎本 委員	15 名
第 七回	27. 8. 4	K C S 鹿児島情報専門学校	石田 委員	15 名
第 八回	27. 8. 6	市川市教育センター	木村 委員	55 名
第 九回	27. 8. 6	K C S 福岡情報専門学校	三宅 委員	15 名
第 十回	27. 8. 18	佐賀大学文化教育学部附属中学校	藤村委員長	63 名
第十一回	27. 8. 20	佐賀県教育庁学校教育課（第一部）	佐久間委員	40 名
第十二回	27. 8. 20	佐賀県教育庁学校教育課（第二部）	佐久間委員	38 名
第十三回	27. 10. 10	日本教育工学協会（J A E T）富山大会	藤村委員長 他 5 名	58 名
第十四回	28. 3. 4	教育の情報化推進フォーラム	藤村委員長 他 4 名	200 名
合計				641 名

図表 6 やまぐち総合教育支援センターでのセミナー風景（平成 27 年 7 月 3 日）



図表 7 和歌山県教育センターでのセミナー風景（平成 27 年 7 月 3 日）



図表 8 大阪情報専門学校でのセミナー風景（平成 27 年 8 月 4 日）



図表 9 市川市教育センターでのセミナー風景（平成 27 年 8 月 6 日）



図表 10 日本教育工学協会（J A E T）富山大会のセミナー風景（平成 27 年 10 月 10 日）



(2) セミナー開催団体の所感

セミナー開催団体の所感を以下に抜粋する。

- 1) 児童・生徒の利用実態について理解することができた
- 2) 情報モラルの指導は重要と考えているが、指導時間がなかなか確保できない
- 3) 任意受講の研修ではなく悉皆研修にしないといけないのではないか。
- 4) WEB 教材を活用した具体的な授業イメージを得ることができた。
- 5) 提供された教材を利用して授業をしたい。

図表 1 1 セミナー開催団体の所感

開催場所	講師	所感
堺市教育委員会	佐久間 委員	・今現在、問題に感じている部分での研修内容で助かった。 ・具体的なコンテンツについて教えていただき、学校現場で早速活用してみる。 ・参加者の間で話し合う時間があり、情報交流もできてよかった。 ・夏季研修のテーマとして、全教職員で取りこんでいきたい。 ・「ネットいじめ防止プログラム」実施事業における、児童生徒に対する「ネットいじめ防止」授業の実施を予定している。その際に利用する。
やまぐち総合教育 支援センター	三宅 委員	講演では、学校と家庭が連携して行う情報モラル教育の重要性を受講者は認識することができた。また、「ネット社会の歩き方」の教材を使った研修や授業を検討することで、実際の指導場面を想定し、今後の情報モラル教育を行うことの重要性を実感することができたようである。 アンケートなどから、参加者が意欲的に情報モラル教育への取り組みもうとする意見が見られた。また、山口県内の学校及び教育委員会主催の教員・保護者対象の研修会（サテライト研修：昨年度実績 26 会場、参加者 1475 名）を実施し、本研修会の内容を踏まえた情報モラル教育の普及を進めていく。来年度以降も情報モラルに関する研修会を開催する予定である。
和歌山県教育センター	石原 委員	「情報モラル研修」に参加したことがない先生が多く、「役に立つ資料が多かった」「初心者でもわかり易かった」などの意見があり、授業や研修の実施に大変役に立つ内容であったことが好評につながり、全体的に実りのある研修であった。
鹿児島市立学習情報センター	西田 委員	最新の状況を反映した教材資料を活用して分かりやすい講演が行われた。ワークショップによる研修は受講者が実践的なイメージを持つことができ、多くの先生と意見交換ができ有意義な時間となった。受講者も大変満足しており、充実したセミナーとなった。情報モラル指導のリーダーになる教員を増やすために、来年も引き続き研修を計画したい。

千葉市教育センター	高橋 委員	情報モラル教育の最新の指導法をわかりやすく丁寧に教えていただいた。資料も数多く提供していき、校内研修で活用できると好評であった。また、毎年情報セキュリティ研修、情報モラル研修を実施しているが、来年度も実施する方向である。
大阪情報専門学校	榎本 委員	殆どの先生が、生徒指導の向上を目的とされ、真剣な面持ちで受講していた。受講の内容については、アンケートの結果から見ても、参考になったようで、講師の分かり易い話に、強く頷かれている方もいた。また、今回はワークショップを開催したが、こちらは実際の進め方などが体験でき、満足頂く内容となった。 今後の計画は以下のとおり ・学校独自で高校教員向けの情報モラル講座開催を検討中。 ・高校を対象として独自講演開催の提案を行う。
K C S 鹿児島情報専門学校	石原 委員	・ネットワークの抜け道などを常に気にしていたが、自分の考え付かない事が多くあった。 ・教材を準備する手間のために授業がしづらい事も多いので、このような講座があると大変助かる。 ・より具体的に分かりやすく、興味を引く内容だと思った。危機感をもって聴くことが出来た。 ・データに加え話すコメントまで付けていただいているので、すぐに活用できると思う。 ・とても興味深い内容でした。 ・時代の変化に情報モラルの指導のレベルアップの必要性を感じた。 ・時間が少なくもう少しお話が聞きたかった。講座資料（PP 資料）が分かりやすく、伝わりやすい内容だった。内容すべてを記録できないため、資料として頂きたいと思った。 大半の受講者が、自校へ持ち帰り職員や生徒・保護者向けに研修を実施したいという感想が多かった。また、石原先生の講義の進め方（話術など）が大変参考になり「あっという間に時間が経過した」という感想も頂いた。 情報処理専門学校として、率先して中学校や高等学校へ情報モラルや個人情報、SNS等の問題（価値や弊害など）について積極的に啓蒙し、今回のような講演を企画していきたいと思う。
市川市教育センター	木村 委員	・本セミナーの受講者が各学校における情報モラル教育の中心となって校内研修を行い、情報モラル教育の中心となる。 ・各グループの発表内容を、各学校の PC からアクセスできる共有スペースに保存することにより、活用をすすめる。

K C S 福岡情報専門学校	三宅 委員	参加された先生方は、「学校内でSNSのトラブルがある」「教師間でSNSに対する知識の差がある」「現状が把握できていない」といった具体的な課題を持って受講していた。その中で導入として「データから見る現状」では、数値(特に近年の推移)の背景や読み取り方についての説明もあり、非常に分かり易いとの感想だった。また授業の具体例やポイントを説明していただいたことで、何を授業で取り組むべきかといった事を実感できたようだった。「ネット社会の歩き方」で教材となるものが使用できるのは、校務で多忙な先生方にとっては有効な情報だった。 午後のワークショップでは、積極的に意見交換や資料作成を行い、プレゼン時に三宅先生に頂いたアドバイスが非常に助かった。研修を受講しても実際の授業に反映するのは、難しいのが現状だが、今回受講された先生方は、ワークショップを通して、そのイメージができたことも大きな成果のようだった。 福岡校では、高等学校との教育連携の一環として、情報モラル講演を開催し、普及に尽力している。実績としては、宮崎・熊本・佐賀・福岡の高校及び中学校にて講演を行っている。
佐賀県教育庁(一部・二部)	佐久間 委員	情報モラルに関する様々な課題を、データとともに示していただき、現在のネット社会状況や問題点について確認することができた。また、「親子セミナー」で話された内容を紹介され、ネット社会の特性やネット社会から子どもを守る方法等についても理解を深めることができた。また、ワークショップでは、「ネット社会の歩き方」のHPに掲載されている教材が質・量ともに充実していることに満足されている参加者が多く、ワークショップで作成した授業案や研修会案だけでなく、他の教材や資料を用いて授業等を実施したいという声もあった。 ワークショップの時間が短く、話し合いが深められなかったのは残念だが、講演だけの研修ではなく、参加者同士の意見交換の時間が設けられており、そのことに参加者も満足されていた。授業や研修にすぐに活用できる教材・資料が豊富に提供されていることを、参加者が実感でき、情報モラル教育の実践意欲の喚起につながったことが成果である。参加者には、各学校や地域において本セミナーの受講成果を積極的に還元するようお願いしている。このセミナーは、県立学校において必須研修という位置付けで実施していることから、今後、情報モラル教育の実施状況を報告してもらうとともに、今年度も県内の教職員や保護者を対象とした情報モラル等についてのシンポジウムを開催予定である。

(3) 受講者へのアンケート

セミナー内容を改善するために受講者へ下記アンケートを実施した。

図表 1 2 受講者向けアンケートシート（おもて）

★マークのしかた	
	悪い
	良い
「ネット社会の歩き方」講師育成セミナー アンケート 「ネット社会の歩き方」講師育成セミナーを受講いただきありがとうございます。ご意見・ご感想を聞かせください。 選択式の回答は、該当箇所のマーク○を塗りつぶしてご回答ください。 ○: 空白マーク ●: 正しいぬりつぶし ◐: 不十分なぬりつぶし 記述式の回答は、回答欄からはみ出さないように記入してください。 この用紙は機械で処理します。回答欄以外に書き込みをしたり、用紙を汚したり、折り目を付けたりしないように注意してください。 (1) 【択一選択設問】あなたの性別は？ ☐ 男 ☐ 女 (2) 【択一選択設問】あなたの年齢は？ ☐ 20～29歳 ☐ 30～39歳 ☐ 40～49歳 ☐ 50～59歳 ☐ 60～69歳 ☐ 70歳以上 (3) 【単一選択設問】あなたの所属についてお伺いします。以下の項目から、あなたの所属に合うものを1つ選んでください。（1つにマーク） ☐ 小学校 ☐ 中学校 ☐ 高等学校 ☐ 特別支援学校 ☐ それ以外の学校 ☐ 行政 ☐ その他 (4) 【単一選択設問】あなたの職名についてお伺いします。以下の項目から、あなたの職名に合うものを1つ選んでください。（1つにマーク） ☐ 校長 ☐ 副校長 ☐ 教頭 ☐ 教諭 ☐ 指導主事 ☐ その他 (5) 【複数選択設問】あなたの分掌分野についてお伺いします。あなたの分掌分野に合うものを選んでください。（複数回答可） ☐ 教科指導 ☐ 生徒指導 ☐ 教務 ☐ 情報教育 ☐ 研修 ☐ その他 (6) 【複数選択設問】あなたの担当教科についてお伺いします。あなたの担当教科に合うものを選んでください。（複数回答可） ☐ 小学校 ☐ 情報 ☐ 技術家庭 ☐ 国語 ☐ 社会 ☐ 数学 ☐ 理科 ☐ 英語 ☐ 音楽 ☐ 美術 ☐ 書道 ☐ 保健体育 ☐ その他 (7) 【単一選択設問】これまで受講された研修についてお伺いします。過去に、今回のような情報モラル指導者を養成する研修会に参加したことがありますか。（1つにマーク） ☐ ある ☐ ない (8) 【単一選択設問】これまでの情報モラル研修への関わり方についてお伺いします。過去に、情報モラルに関連したセミナー・研修の企画や講師を行ったことがありますか。（1つにマーク） ☐ ある ☐ ない	

1 / 2

講師育成セミナーアンケート

(2014年度)

図表 1 3 受講者向けアンケートシート（うら）

★マークのしかた



(9) 【複数選択設問】受講動機についてお伺いします。本セミナーへの受講動機として該当する項目の番号を選んで下さい。（複数回答可）

☐ 情報教育の担当をしているため
 ☐ 情報モラル指導のレベルアップのため
☐ 上司から受講の指示、勧めがあったため
 ☐ その他

(10) 【単一選択設問】セミナーの内容についてお伺いします。今後、みなさんが情報モラル研修会を実施する際に今回のセミナーが参考になると思うか、【参考度】をお答えください。（1つにマーク）

☐ 参考にならない
 ☐ あまり参考にならない
 ☐ やや参考になる
 ☐ 大変参考になる

(11) 【自由記述設問】今回のセミナー内容に関してご意見・ご感想がございましたら、ご記入ください

(12) 【単一選択設問】セミナーの教材についてお伺いします。今後、みなさんが情報モラル研修会を実施する際に今回紹介した教材が活用できると思うか【活用度】をお答えください。（1つにマーク）

☐ 活用できない
 ☐ あまり活用できない
 ☐ やや活用できる
 ☐ 大変活用できる

(13) 【自由記述設問】今回ご紹介にした教材に関してご意見・ご感想がございましたら、ご記入ください

(14) 【単一選択設問】今回のセミナーで得られた情報の展開についてお伺いします。本セミナー以降に、校内などでセミナー、研修会など開催する予定はありますか。あなたの考えに合うものを1つ選んでください。（1つにマーク）

☐ セミナー、研修会などの開催する
 ☐ 現時点で予定はないが、可能な規模・内容で計画したい
☐ セミナー、研修会など開催の予定はない
 ☐ その他

(15) 【自由記述設問】開催を計画、予定されるセミナーや研修会はどのようなものでしょうか、ご記入ください

(16) 【自由記述設問】最後に、全体を通してご意見・ご感想がございましたら、ご記入ください

アンケートへのご協力ありがとうございました。

2 / 2
 情報モラルセ
 ミナーアンケート
 （2014年度）

1) 受講者プロフィール

セミナー受講者のプロフィールを図表 14 から 18 にまとめた。

・性別年代別受講者数

どの年代においても、男性受講者の方が多い。年代別では 30 歳台次いで 40 歳台となっている。

図表 1 4 性別年代別受講者数（単一選択）

	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳代	無回答	合計
男性	38	71	55	40	7	1	0	212
	17.9%	33.5%	25.9%	18.9%	3.3%	0.5%	0.0%	
女性	16	14	17	8	0	0	0	55
	29.1%	25.5%	30.9%	14.5%	0.0%	0.0%	0.0%	
無回答	0	0	0	0	0	0	1	1
合計	54	85	72	48	7	1	1	268
	20.1%	31.7%	26.9%	17.9%	2.6%	0.4%	0.4%	

・学校種別受講者数

全国の学校種別の教員の人数が、小学校：中学校：高等学校＝1.0：1.4：1.5であることを鑑みると、中学校・高等学校での教員の比率が昨年より増えてきている。

図表 1 5 学校種別受講者数（単一選択）

学校					行政	その他	無回答	合計
小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	その他				
58	84	89	18	5	5	6	3	268
21.6%	31.8%	33.2%	6.7%	1.9%	1.9%	2.2%	1.1%	

・役職別受講者数

一部の熱心な校長先生や教頭先生が受講されているが、教諭が圧倒的に多い。

図表 1 6 役職別受講者数（単一選択）

校長	副校長	教頭	教諭	指導主事	その他	無回答	合計
2	0	3	236	6	19	2	268
0.7%	0.0%	1.1%	88.1%	2.2%	7.1%	0.7%	

・分掌分野別受講者数

勤務校で情報教育を担当されている先生が多いが、次いで「生徒指導」担当の先生が多い。

図表 1 7 分掌分野別受講者数（複数選択）

教科指導	生徒指導	教務	情報教育	研修	その他	合計
103	64	42	104	23	48	384
26.8%	16.7%	10.9%	27.1%	6.0%	12.5%	

・担当教科別受講者数

担当教科別に特に偏りは無い。

図表 1 8 担当教科別受講者数（複数選択）

小学校	情報	技家	国語	社会	数学	理科
57	25	16	10	19	31	34
英語	音楽	美術	書道	保健体育	その他	合計
13	3	4	2	26	62	302

2) 受講者のこれまでの情報モラル研修との関わり

セミナー受講者のこれまでの情報モラル研修との関わりを図表 19 から 21 にまとめた。

・過去の受講経験

過去に情報モラル研修を受講したことの無い先生の方が多かった。

図表 1 9 過去に、情報モラル指導者を養成する研修会に参加したことがあるか（単一選択）

ある	ない	合計
80	186	264
30.3%	69.7%	

・過去の講師経験

過去に情報モラル研修を企画したことが無い先生の方が多かった。

図表 2 0 過去に、情報モラルに関連したセミナー・研修の企画や講師を行ったことがあるか（単一選択）

ある	ない	合計
38	226	264
14.4%	85.6%	

・本セミナーの受講動機

「上司からの指示」の割合は少なくなっているが、積極的に受講されている先生は少ないと思われる。

図表 2 1 本セミナーの受講動機（単一選択）

1：情報教育の担当になっているため	90	27.4%
2：情報モラル指導のレベルアップのため	152	46.2%
3：上司からの指示があったため	57	17.3%
4：その他	30	9.1%
回答数	329	

3) 本セミナーに対する評価

・本セミナーは、今後の情報モラル研修会実施上の参考になるか。

97% の受講者が有用と考えている。

図表 2 2 本セミナーの有用度（単一選択）

参考にならない <<<<<< 参考になる			
1	2	3	4
4	3	59	193
1.5%	1.2%	22.8%	74.5%
		3or4 の回答比率	
		97.3%	

- ・本セミナーで利用した教材は、今後の情報モラル研修会に活用できるか。
98% の受講者が教材を活用できると考えている。

図表 2 3 本セミナー教材の有用度（単一選択）

活用できない <<<<<< 活用できる			
1	2	3	4
0	0	68	190
0.0%	0.0%	26.4%	73.6%
		3or4 の回答比率	
		100.0%	

4) 今後のセミナー開催予定

セミナーの開催を具体的に考えている先生が少ないことは今後の課題と考えている。

図表 2 4 今後のセミナー開催予定（単一選択）

1. セミナー、研修会などの開催する	40	15.5%
2. 現時点で予定はないが、可能な規模・内容で計画したい	122	47.3%
3. セミナー、研修会など開催の予定はない	79	30.6%
4. その他	17	6.6%
回答数	258	

4. 学習教材開発

(1) 学習教材開発

平成 26 年度に「中学生・高校生のための ネット社会の歩き方」の冊子にいくつか新しいテーマを学習教材として追加したが、スマートフォンの爆発的な広がりや、コミュニケーションサイトに関連するトラブルが頻発していることを受け、過去の教材を見直し、当初 15 教材の改訂を想定していたが、実際委員会において検討した結果「現在使われなくなった言葉」「状況」などを含め最新のコンテンツにするためには最低でも 19 個のコンテンツの更新が必要であることがわかり、19 のコンテンツの改訂を実施した。

また、Web 教材はイラストに吹き出しの文字がある。音声が入っている。などの点から部分的な修正ができなかった 8 コンテンツについては全部作り直しとなった。

教材の開発に際しては、対策が必要なトラブル事例のピックアップ、主テーマの選定、シナリオの開発、詳細シナリオの開発、アニメーション用絵コンテの開発、アニメーションの開発、音声データの付加、という手順をとった。

図表 2 5 学習教材一覧

番号	担当	対象	タイトルと概要
1	西田委員	小中高	◆肖像権に気をつけて ・「肖像権」とはどのような権利かを知り、「肖像権」を尊重することを知る。
2	木村委員	中高	◆むやみにタップしてはダメ ・Web ページでむやみにボタンをタップすると、ワンクリック詐欺などの被害に合う可能性があることを知る。
3	石原委員	小中高	◆後輩からの相談 ・後輩からのネットトラブルに関する相談を受け、みんなで問題解決の方法を話し合い、よりよい解決策は何かを吟味する態度を身につける。
4	榎本委員	中高	◆ID 連動の恐怖 ・新しいサイトを利用するとき、他の SNS で使用している ID やパスワードでログインすると、さまざまな問題が生じる可能性があることを知る。
5	佐久間委員	小中高	◆プリペイドカードは本当に便利なの？ ・プリペイドカードは便利なシステムだが、カードの買い過ぎやゲーム依存に陥る危険があること、また番号さえわかればカードが無くても使えるため、トラブルが起こる可能性があることを知る。
6	梶本委員	中高	◆無断でアクセスポイントを利用すると ・パスワードが設定されている無線 LAN に、いろいろなパスワードを試して、無断で接続することは法律違反となることを学ぶ。
7	三宅委員	中高	◆スマホのマナー ネットに投稿されている写真や、歩きスマホの問題を通して、スマートフォンの利用上のマナーについて考える。。

8	高橋委員	中高	◆パスワードが盗まれたら ID やパスワードが盗まれて被害が発生した事例を通して、ID やパスワード管理の重要性を知る。
---	------	----	---

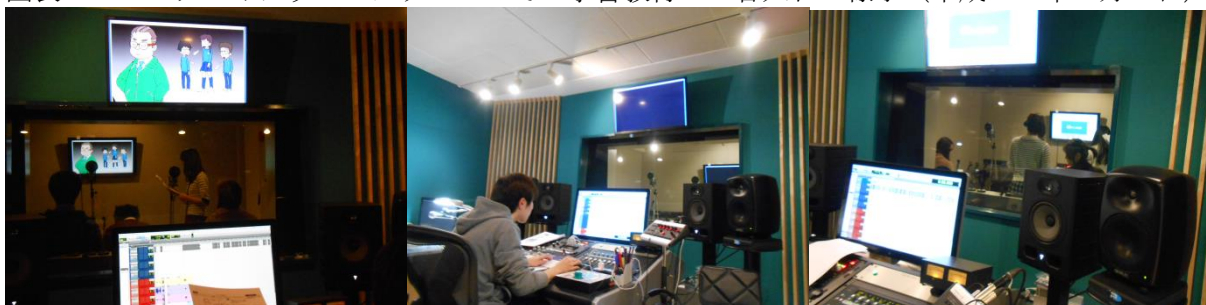
図表 2 6 学習教材開発担当者一覧

所属	役職及び氏名	役割
株式会社クレステック	スーパーバイザー 古川 功一	総括責任者
フリー	市田 晶子	シナリオライター
RME株式会社	柴田 勝俊	音声ディレクター
アッセンブラージュ株式会社	田口 義治	ミキサー
RME株式会社	天野 未来	声優
同上	新井 慶太	声優
同上	筏井かなえ	声優
同上	伊藤あすか	声優
同上	因幡 優子	声優
同上	入倉 敬介	声優
同上	上田 那央	声優
同上	榎 マリ子	声優
同上	小倉 直寛	声優
同上	北川 ゆめ	声優
同上	合田慎二郎	声優
同上	高橋 春香	声優
同上	西澤 香奈	声優
同上	平林 正	声優
同上	宮内佐和子	声優
同上	八剣すみれ	声優
同上	横田 和輝	声優

図表 2 7 スタジオアッセンブラージュでの学習教材のシナリオ微調整の様子
(平成 2 8 年 2 月 8 日)



図表 2 8 スタジオアッセンブラージュでの学習教材への音入れの様子 (平成 2 8 年 2 月 8 日)



(2) 学習教材例

今回開発した教材は以下の特長を有している。

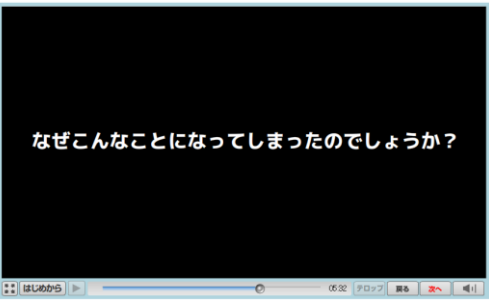
- ・当社の WEB ページで直接利用できる。
- ・WEB ページからダウンロードして利用することも可能としている。
- ・いずれの教材も 4 分未満であり、小中高校の教員が授業で使い易くしている。
- ・いずれの教材も音声データが入っており、自学用にも利用できる。

図表 2 9 教材番号 6 7 「パスワードが盗まれたら」の流れ

場面	イメージ	概要
0 1	パスワードが盗まれたら 	・インターネットの多様なサービスが、パソコンとスマートフォンの両方から利用でき、便利になった反面、IDとパスワードの漏えいに伴う被害が多発している。対策として、ID・パスワードの正しい管理により、被害を予防することが求められる。
0 2	パスワードが盗まれたら 	* ネットのトラブルを先生に相談に来たカイト 先生が机で作業している。ドアをノックし、カイトが入室。 カイト「先生、相談があります。」 先生「どうしたの? カイト君」 カイト「実は、ネットで貯めていたポイントが消えたんです。」
0 3	パスワードが盗まれたら 	カイト「2000 ポイント以上あったのに、今はゼロになってしまって…」 先生「そうか まずはポイント履歴を見ようか」
0 4	パスワードが盗まれたら 	先生「うーん 電子マネーに交換されてるね…」 カイト「ぼくは交換した覚えがないし、電子マネー番号もぼくのと違うんです…」

05	パスワードが盗まれたら だれかにIDとパスワードを盗まれたのかもしれないなあ... やっばり... したらいいですか...? まず、証拠として画面を保存して、パスワードを変更したほうがいいな 先生は、画面を保存してパスワードを変更したほうがいいと言いました	先生「とすると…だれかに ID とパスワードを盗まれたのかもしれないなあ…」 カイト「…やっばり…」 カイト「どうしたらいいですか…？」 先生「うん、まず、証拠として画面を保存して、パスワードを変更したほうがいいな」
06	パスワードが盗まれたら え？何のこと？ おい、カイト！ここにいたのか 昨日のカードの代金、返してくれよ そのとき、イチロー君がカイト君を見つけてやってきました	イチロー「おい、カイト！ここにいたのか 昨日のカードの代金、返してくれよ」 カイト「え？何のこと？」
07	パスワードが盗まれたら えー？忘れちゃったのか？ オマエに頼まれて買ってあげたプリペイドカードだよ なんだそれ…そんなもの頼んでないよ じゃあこれ見ろよ！ イチロー君がカイト君に話があるようです	イチロー「オマエに頼まれて買ってあげたプリペイドカードだよ」 カイト「なんだそれ…そんなもの頼んでないよ」 イチロー「えー？忘れちゃったのか？」 イチロー「じゃあ これ見ろよ」
08	パスワードが盗まれたら いまちょっと手がはなせなくて買っておいてくれる？ いいけど 1000 円のカード 2 枚お願い！ それで、裏のコードを写真に撮って送ってくれる？ スマートフォンの画面には、昨日のカイト君とイチロー君のやりとりが表示されていました	カイト「いまヒマ？」 イチロー「ヒマだけど」 カイト「ちょっとたのみがあるんだけど」 イチロー「なに？」 カイト「NetCoin カード買いたいんだけど」 カイト「いまちょっと手がはなせなくて買っておいてくれる？」 イチロー「いいけど」 カイト「1000 円のカード 2 枚お願い！ それで、裏のコードを写真に撮って送ってくれる？」
09	パスワードが盗まれたら ありがとう！ お金は明日返すよ えー？オレ、こんなの送ってないしー スマートフォンの画面には、昨日のカイト君とイチロー君のやりとりが表示されていました	イチロー「わかった」 カイト「ありがとう！お金は明日返すよ」 カイト「えー？オレ、こんなの送ってないしー」

1 5	パスワードが盗まれたら カイト君、ヒカリさん、2人ともID とパスワードが盗まれてしまったようだけど こういうのは本人の不注意が原因なんだよ パスワードはなぜ盗まれたのでしょうか	<時間経過>
1 6	パスワードが盗まれたら 名前や生年月日とか簡単にわかるパスワードにしていないかな？ してません！ 名前や生年月日をパスワードにしていなかったでしょうか	先生「たとえば…名前や生年月日とか簡単にわかるパスワードにしていないかな？」 カイトとヒカリ「してません！」
1 7	パスワードが盗まれたら ID とパスワードを他人に聞かれるようなところで話したことはないかな？ たとえば、バスの中とか ありません！ ID とパスワードを他人に聞かれるようなところで話していなかったでしょうか	先生「じゃあ…ID とパスワードを他人に聞かれるようなところで話したことはないかな？」 先生「たとえば、バスの中とか」 ヒカリ「ありません！」 カイト「あ…」
1 8	パスワードが盗まれたら パスワードを盗むような不正なアプリをダウンロードした覚えはないかな？ ありません！ あつ… パスワードを盗むような不正なアプリをダウンロードしていなかったでしょうか	先生「いろんなサイトで同じ ID とパスワードを使いまわしたことは？」 カイトとヒカリ「ああっ!!」
1 9	パスワードが盗まれたら いろんなサイトで同じ ID とパスワードを使いまわしたことは？ ギク!! 同じID とパスワードを使いまわしていなかったでしょうか	がっかりした表情のヒカリ、カイト、イチロー SE (ホワンホワン～) 黒バックに包まれていく

20		全画面黒バックの後、 「なぜこんなことになってしまったのでしょうか？」
----	---	--

- ・この教材のように「こんなことをしてはいけないよ」と教えるのではなく、「なぜ、こんなことになってしまったのか皆で話し合おう」というオープンエンドの教材が多く、児童・生徒に少しでも考えさせる場面を提供することを狙っている。

5. 成果発表会

当事業の活動内容を広く広報するために、平成27年度 JAPET&CEC 教育の情報化推進フォーラムにおいて「導入が進むタブレットでも活用 ～ネット社会の歩き方～」と題して分科会 B を開催した。

分科会の概要は以下の通りである。

- ・開催日時 平成27年 3月 4日 16時～17時40分
- ・国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟
- ・来場者数 ワークショップ参加者 60名
ワークショップ非参加者 50名
- ・プログラム JAPET&CEC が提供している学習教材の使い方の紹介
学習教材を使った授業設計
授業のポイントの発表

図表30 成果発表会の様子 講義その1



図表31 成果発表会の様子 グループ討議



図表32 成果発表会の様子 ワークショップ



6. まとめ

近年のICT機器の進展は目覚ましく、個々のハードウェアやソフトウェアに対応した情報モラル教育は事実上不可能になっている。学校教育でよく言われる「流行と不易」を、教える側が良く考え取り組む必要がある。

スマートフォン、携帯ゲーム機の普及により、平易にいつでもどこでもインターネットを利用できる環境が子どもたちに急速に拡大した。それらの変化により誹謗中傷や言葉不足からのいじめ、ネット犯罪の被害や更に加害者となる事例、生活に支障をきたすまでのネット利用などの事例が更に深刻化した。今回の事業は、子どもたちに有効な情報モラル指導を実施させ、充実したコミュニケーションを取れるための指導を行い、更にネット依存の手前で立ち止まるための指導を行えるための対策とした事業を実施した。

ここにおいて、公益財団法人JKAの補助金を原資として、JAPET&CECが情報モラル指導の教材開発と教員向けセミナーを開催することは非常に社会的に価値があると考えている。文部科学省の学習指導要領に基づいた「不易」の部分に関する指導方法の研修と、マスコミへの掲載記事に基づいた「流行」の部分に関する最新の事故、事件、リスク回避方策の伝達は、日々児童・生徒と接している教員にとって指導時の参考になっている。

JAPET&CECでは、「不易」な面での道徳を中心とする「心を磨く」領域の教材提供に特に力を入れていきたい。一方で、「流行」の面では情報を中心とする「情報の知識」「情報の理解」領域の教材提供に力を入れていきたい。具体的には来年度も教員向けセミナーの開催と陳腐化（例えば、ガラケーや出会い系サイトを題材にした教材）した学習教材の更新を予定している。

最後に、少しでも多くの教員が情報モラル指導を实践できるよう、JAPET&CECおよび委員全員が啓蒙活動に邁進する所存である。

以 上

第2章

コミュニケーション力育成のための事業

1. 事業の目的

インターネットは、社会生活の一部となり、買い物や予約申込み等は電話よりもむしろインターネットを利用して行い、インターネット無しでは考えられないというほど、社会生活に浸透している。また、スマートフォンがフィーチャーフォンを上回って普及する現状では、インターネットへの入り口となる端末は、パソコン、携帯電話からスマートフォン、タブレット端末、ゲーム機、音楽プレーヤーのように多様化すると同時に、いつでも、どこでも、誰でもインターネットに接続して、利用できるものとなっており、児童・生徒は保護者の目の届かないところで利用できるようになった。

このように身近になったインターネットであるが、その利用により手軽に多くの情報を入手したり、見知らぬ人々とコミュニケーションを取ったり、自宅での買い物も手軽にできるなど、様々なことが手軽にかつ安全安心にできるようになると同時に、もう一方では児童・生徒が SNS や無料ゲームなどのコミュニティサイトで犯罪などに巻き込まれる事例も発生している。

JAPET&CEC では、児童・生徒の安全安心を願い「教育現場の ICT 安全安心対策事業」を展開しており、この中の一つの事業として「コミュニケーション力育成のための事業」を実施している。

文部科学省の学習指導要領では「言語活動の充実」と記載されているものの、具体的な内容は現場の教員に任されている。我々は、全国の教員に対する実態調査から、言語活動のスキルレベルを協調的段階としての「対話」「交流」と、主張的段階としての「討論」「説得・納得」の4つの段階に分類すると共に児童の発達段階に応じた指導方法を整理した。

そして全国の教育委員会でセミナーを開催できるように、以下のような研修モジュールとしてまとめた。

- A: 理論概説
- B: 課題改善
- C-1: パネル討論
- C-2: ブレーンストーミング
- C-3: ブレーンストーミング+KJ 法
- C-4: イメージマップ
- C-5: バズセッション
- C-6: ポスターセッション

研修会の開催に際しては、この研修モジュールを組み合わせて実施することとした。

また、研修内容は、昨年度実施した結果課題としてあがった、研修内容の授業へのさらなる定着である。

確実に学習活動に活かしていく、またはさらなる定着のために、一箇所について研修を二回実施した。

第一回目の研修で、コミュニケーションツールを活用したワークショップを体験し、第二回目の研修では、一回目の研修で習得したコミュニケーションツールを活用した授業提案をしてもらい、実際に実践授業を行うというものである。実践授業後、授業者と学校内の先生方で、授業検討会を開き、良かった点、課題となった点、またその改善方法を検討し合い、提案授業内容をさらにブラッシュアップしていくものである。

2. 作業項目とスケジュール／作業体制

(1) 作業項目とスケジュール

作業項目とスケジュールは下記の通りである。

図表1 作業スケジュール

作業項目	平成27年									平成28年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
委員会開催			▼① 13									
開催地公募	-----▼											
テキスト改訂		▲-----▼										
セミナー開催			▲-----▼									
学習教材開発		▲-----▼										
成果発表会												▼ 4

(2) 委員会の設置

本事業では有識者で構成する「コミュニケーション力育成検討委員会」を組織して作業に取り組んだ。全2回の委員会を計画（実際には、1回のみ開催）し、作業スケジュールの策定、セミナー開催地の公募と採択、セミナー用テキストの改訂、セミナー開催時の講師、成果発表会での報告等、本事業の全体を管理した。

また、テキスト改訂の実作業、開催地の教育委員会との連絡、セミナー開催準備は事務局が担当した。

図表2 委員一覧

所属	役職及び氏名	
放送大学	教授	中川 一史
船橋市総合教育センター	所長	秋元 大輔
鳥取県岩美町立岩美中学校	教諭	岩崎 有朋
金沢星稜大学	教授	佐藤 幸江
柏市立柏第二小学校	教頭	佐和 伸明
宮城県教育庁生涯学習課	課長補佐	成瀬 啓
柏市立中原小学校	校長	西田 光昭
鹿児島大学	講師	山本 朋弘
金沢星稜大学	教授	村井 万寿夫
茨城大学	准教授	小林 祐紀

図表3 事務局等の体制

所属	役職及び氏名		役割
一般社団法人日本教育情報化振興会	専務理事	鶴田 雅文	責任者
同上	事務局	吉田 真和	総括
同上	普及促進部	渡邊 浩美	連絡窓口、セミナー対応
同上	総務部	赤松伊佐代	JKA 対応

(3) 委員会開催

対面での委員会開催の他、メールによる検討・決議を行った。委員会の開催日、議題は下記の通りである。

図表 4 委員会開催実績

開催回数	開催日	議題
第一回	27. 6. 13	・年度スケジュールの確認 *WG1: 21 世紀コミュニケーション力育成セミナーの実施と評価 *WG2: 授業マイスターの選定と公開に関する検討 *WG3: コミュニケーションツール活用に関するパッケージの開発 ・セミナー開催地採択と担当委員の選定 ・テキスト改訂カ所の検討

(4) 開催地公募

研修会の開催地は以下の要領で行った。

1) テーマ

「コミュニケーション力育成のポイント」

2) 開催時期と時間

平成 27 年 5 月から平成 28 年 1 月の間の午後、最低 2 時間 30 分

3) 対象受講者と会場あたりの定員

教職員 約 30 名程度 (目安)

4) 開催会場

地方自治体等の無償で利用できる会場 および

平成 28 年度活動を見据えたトライアルセミナー(1 回: 有料会場)

5) セミナーの具体的な内容

ICT 社会におけるコミュニケーション力の育成検討委員会と貴教育委員会の協議で決定する

6) セミナーのプログラム (例)

◆同一地域での二回開催を基本とする◆

第 1 回目: コミュニケーション力を育成する授業とは

テーマ: コミュニケーション力の重要性

概 要: 21 世紀型コミュニケーション力の概説

コミュニケーションスキルの分類

コミュニケーション力を育成するツールの紹介

コミュニケーションツールを使ったワークショップ

講 師: 学識経験者

第 2 回目: 実践授業

テーマ: 第 1 回目のセミナーで習得したスキルを実際の授業で実践する

概 要: 実践授業の実施

授業研究会の開催

(授業研究会の中でもコミュニケーションツールを活用する)

講 師: 学識経験者

(5) セミナー用テキスト改訂

セミナー用テキストの中の誤字脱字を中心に改訂作業を行った。また、コミュニケーション力育成ツールの差し替えを行った。

3. セミナー開催

(1) セミナー開催

本事業で提供するセミナーは、全国の小中学校が掲げている研究テーマの一プログラムとして実施される場合が多い。この関係で、教員が比較的時間を確保し易い、夏休み或いは冬休み期間に開催が集中している。

図表 5 セミナー開催実績

開催回数	開催日	開催場所	講師	人数
第 一回	27. 5. 30	石川県教育工学会・金沢星稜大学 (研究会)	佐藤 委員	30 名
第 二回	27. 7. 7	大田原市立金田南中学校(研究会)	山本 委員	40 名
第 三回	27. 8. 4	熊本県高森町教育委員会(研究会)	山本 委員	46 名
第 四回	27. 8. 5	岡山中央中学校区幼小中連絡協議会(研究会)	成瀬 委員	72 名
第 五回	27. 8. 26	佐賀県みやき町立中原小学校(研究会)	中川 委員長 山本 委員	21 名
第 六回	27. 8. 31	仙台市立六郷小学校(研究会)	佐藤 委員	31 名
第 七回	27. 8. 31	船橋市立坪井小学校(研究会)	中川 委員長 西田 委員 楠本 委員	58 名
第 八回	27. 11. 6	熊本県高森町教育委員会(実践授業)	中川 委員長 山本 委員	350 名
第 九回	27. 11. 25	岡山市立岡山中央中学校(実践授業)	成瀬 委員	39 名
第 十回	27. 12. 7	仙台市立六郷小学校(実践授業)	佐藤 委員	30 名
第十一回	27. 12. 8	石川県教育工学会・羽咋市立瑞穂小学校 (実践授業)	佐藤 委員	14 名
第十二回	27. 12. 14	船橋市立坪井小学校(実践授業)	秋元 委員 佐和 委員	57 名
第十三回	27. 12. 15	佐賀県みやき町立中原小学校(実践授業)	中川 委員長	37 名
第十四回	27. 12. 22	大田原市立金田南中学校(実践授業)	山本 委員	35 名
第十五回	28. 1. 15	21 世紀コミュニケーション力育成セミナー・ リファレンス博多駅東 (記念講演・授業実践・ワークショップ)	赤堀 会長 中川 委員長 佐藤 委員 山本 委員	95 名
合計				955 名

図表 6 大田原市立金田南中学校での研究会風景 (平成 27 年 7 月 7 日)



図表 7 岡山市立岡山中央中学校で研究会風景（平成 27 年 8 月 5 日）



図表 8 船橋市立坪井小学校での研究会風景（平成 27 年 8 月 31 日）



図表 9 佐賀県みやき町立中原小学校での実践授業と研究会の風景（平成 27 年 12 月 15 日）



図表 10 福岡セミナー（リファレンス博多駅東）でのワークショップの風景（平成 28 年 1 月 15 日）



(2) セミナー開催団体の所感

コミュニケーション力の育成研修の開催団体からは、研修開催後に実施報告書を提出してもらう。開催団体からの実施報告書（抜粋）を以下に示す。

本セミナーは同一地域での二回開催を基本としており、1回目の開催では「コミュニケーション力を育成する授業とは」ということで、概念、ツールなどについて学んでいただき、第2回目では、実践授業、第1回目のセミナーで習得したスキルを実際の授業で実践する。として実際に実証事業を実践していただくほか、講師によるモデル授業の様子を学んでいただいた。

① 熊本県高森町教育委員会(研究会)

図表 1 1

開催日時	平成 27 年 8 月 4 日(火) 13時30分～15時30分
開催場所	高森町立高森東小学校・高森中央小学校・高森東中学校・高森中学校
参加者人数	46名 内訳：指導主事 0名（社会教育主事含む） 小学校教員 27名 特別支援学校教員 0名 中学校教員 17名 研究教諭・研究員 0名 高等学校教員 0名 他 2名
研修の狙い	○ブレインストーミングやKJ法バズセッション等の思考ツールを教師がワークショップ型研修の中で実際に体験・習得する。 ○実際の授業で思考ツールを子どもたちに活用させることにより、コミュニケーション力の向上につなげる。
考察	○模擬授業 場所：英語ルーム 〔模擬授業1〕 佐賀市立赤松小 横地 千恵子 教諭 小学校5年国語科のパンフレット作りにおいて、模擬授業が行われた。掲載する記事を選別する場面では、隣の人との対話を通してふるさとの良さについて考えを出し合い、既存の知識を確認できるようにした。また、高森町の良さをどのように伝えるかについては、イメージマップを用いて、全体の意見を一覧して整理した。 〔模擬授業2〕 高森中央小学校 城井 順一 教諭 小学校5年の情報産業学習において、模擬授業が行われた。先ず、新聞のテレビ欄を一人一台のタブレット端末にデジタルシートとして配布し、テレビ編成の工夫について調べさせた。どのような視点で調査を進めるかについては、班毎に判断させるようにした。これにより、複数の情報から必要な情報を取り出しながら、主体的に課題解決に向かわせることができた。 ○グループ協議 模擬授業の内容について、ワークショップ形式で協議が行われた。手法としては、ブレインストーミングとKJ法を併せて用いた。具体的には、CEC21ワークショップ研修モジュールを用い、「思考力・表現力の育成を図るICT活用について」というテーマを共有した。次に、基本ルールと進め方を理解し、KJ方を用いて模擬授業の内容について意見を交流した。複数の班に発表してもらい、それぞれの良さを共有するようにした。この研修により、コミュニケーション力の育成を図る授業の展開について具体的事例をもとに考えを深めることができた。 ○講話 熊本県庁教育政策課の山本朋弘主幹（現鹿児島大学教育学部）による講話では、協調的レベルから主張的レベルに段階的に指導を行うことで、協働的な学びの質を向上させることができることを学んだ。児童の発達段階を考慮して、系統的・計画的にコミュニケーション力の育成を図る指導の充実を図る必要がある。

研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	・模擬授業において学んだ手法を、実際に授業で取り入れるようにした。具体的には、3年生国語科について、イメージマップを用いてキーワードを整理することで説明文の読み取りに生かすことができた。また、4年社会科において、地域の環境保全のために行われている様々な取組をKJ法を用いて整理し、調査課題を明確にすることができた。算数・数学科においても学習班におけるブレインストーミングを通して協働的な学びを活性化し、授業のねらい達成につなげることができている。 ・研修プランによるモジュール内容説明資料を参考にすることで、コミュニケーション力の育成につながる様々な手法を教師自身が自主的に学ぶことができた。 ・市内小中4校それぞれでの校内研修において、ブレインストーミングの手法を用いて協議を進めるようにした。特に、アイディアの量にこだわることやアイディアを融合させて改良することの意義を認識することで、授業改善につながる話し合いを実現することができた。 ・11月6日の高森町小中学校研究発表会では、イメージマップやブレインストーミングを活用した社会科授業を提案する予定である。これまでの調査活動やまとめ学習において、日常的にこれらの手法を取り入れてきた成果を示すことができると考える。
--	---

② 佐賀県みやき町立中原小学校(研究会)

図表 1 2

開催日時	平成27年8月26日(水) 13時30分～15時30分
開催場所	佐賀県 みやき町立中原小学校
参加者人数	25名 内訳：指導主事 名（社会教育主事含む） 小学校教員 25名 特別支援学校教員 0名 中学校教員 0名 研究教諭・研究員 0名 高等学校教員 0名 他 0名
研修の狙い	○イメージマップとタブレット端末を活用した模擬授業・ワークショップを行うことで、教職員の授業力アップと児童生徒のコミュニケーション力育成をめざす。
考察	○模擬授業では、6年生の総合的な学習「中原小のよさを伝えよう」の導入としてイメージマップを活用した単元構成で実施した。「中原小のよさ」としてこれからも残してほしい伝統についてイメージマップでイメージを広げ、グループで課題を絞っていくものである。タブレット端末の活用では、主な行事等の写真を見られるように、決まったイメージマップを写真にとり、全体共有する場面で活用した。 ○模擬授業後は小グループごとに「よかったところ」「改善点、課題」を付箋に書き、出し合い、全体で共有した。イメージマップに関しては、観点があったことでイメージが広がった、という意見と逆に広がり制限された、という意見も

	あり、何をどう書かせるかねらいをしっかりと定めて書かせることが大切だと思った。 ○イメージマップを書かせた後、一人→二人ペアと意見を広げ、その後グループで3項目に絞る話し合いをしたが、3つに限定することで、グループでの話し合いが活発になっていた。コミュニケーションを活性化させるために限定することは手だてとして有効だった。 ○タブレット端末は導入されてはいるが、まだ不安をもっている職員もたくさんおり、ワークショップでも不安の声がたくさん聞かれた。授業場面を通して活用イメージを広げ、ミニ研修などでスキルアップを図っていききたい。 ○ワークショップを受けて、中川先生、山本先生に、イメージマップの拡散的思考と集中的思考について、段階制について、共有のレベルについて、タブレット端末の成功例、失敗例など詳しく話をしていただいたので、参加者からもイメージマップでの活用イメージが広がり大変参考になったという感想が多数あがった。今後の授業に活かしていきたい。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	○研修後、いくつかの学年でイメージマップを取り入れた授業を行った。 ①3年生 国語「すがたをかえる大豆」 ②4年生 学級活動（食育）「みんなの朝ご飯は？」 ③総合的な学習「大豆を育てよう」 ④6年生 算数「拡大図・縮図」 など。 ①は、教科書の本文の構成をつかませるためのイメージマップ ②③はキーワードからイメージを広げるイメージマップ ④は学んだ事を整理する目的でのイメージマップとして取り入れた。

③ 大田原市立金田南中学校(研究会)

図表 1 3

開催日時	平成 2 7 年 7 月 7 日 (火) 1 3 時 3 0 分～1 5 時 3 0 分
開催場所	大田原市立金田南中学校
参加者人数	2 7 名 内訳：指導主事 2 名 (社会教育主事含む) 小学校教員 2 5 名 特別支援学校教員 名 中学校教員 名 研究教諭・研究員 名 高等学校教員 名 他 名
研修の狙い	イメージマップとタブレット端末を活用した模擬授業・ワークショップを行うことで、教職員の授業力アップと児童生徒のコミュニケーション力育成をめざす。
考察	○模擬授業では、6 年生の総合的な学習「中原小のよさを伝えよう」の導入としてイメージマップを活用した単元構成で実施した。「中原小のよさ」としてこれからも残してほしい伝統についてイメージマップでイメージを広げ、グループで課題を絞っていくものである。タブレット端末の活用では、主な行事等の写真を見られるように、決まったイメージマップを写真にとり、全体共有する場面で活用した。 ○模擬授業後は小グループごとに「よかったところ」「改善点、課題」を付箋に書き、出し合い、全体で共有した。イメージマップに関しては、観点があったことでイメージが広がった、という意見と逆に広がり制限された、という意見もあり、何をどう書かせるかねらいをしっかりと定めて書かせることが大切だと思った。
研修開催後についてのアクション（研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのかをお書き下さい）	研修後、いくつかの学年でイメージマップを取り入れた授業を行った。 ① 3 年生 国語「すがたをかえる大豆」 ② 4 年生 学級活動（食育）「みんなの朝ご飯は？」 ③ 総合的な学習「大豆を育てよう」 ④ 6 年生 算数「拡大図・縮図」 など。①は、教科書の本文の構成をつかませるためのイメージマップ ②③はキーワードからイメージを広げるイメージマップ ④は学んだ事を整理する目的でのイメージマップとして取り入れた。

④ 大田原市立金田南中学校（実践授業）

図表 1 4

開催日時	平成 2 7 年 1 2 月 2 2 日 (火) 1 3 時 0 0 分～1 5 時 0 0 分
開催場所	大田原市立金田南中学校
参加者人数	3 0 名 内訳：指導主事 2 名（社会教育主事含む） 小学校教員 2 5 名 特別支援学校教員 名 中学校教員 名 研究教諭・研究員 名 高等学校教員 名 他 3 名
研修の狙い	○タブレット端末等の ICT を活用した協働学習の授業を実施し、参観した教師を対象にした授業研究会やワークショップを行うことで、教職員の授業力アップと児童生徒のコミュニケーション力育成をめざす。
考察	1. 実施した授業の内容 (1) 学年・教科 中学校 2 年国語 単元名 「モアイは語る—地球の未来」 (2) 授業者 2 年 2 組 佐々木 亮太 (3) 授業の目標 話し合い活動を通して意見交換をし、根拠を明確にして答えを読み取ることができる。 (4) 授業での活用の様子 個人でまとめたことをグループで話し合い、タブレットにまとめる。 (5) 授業研究会の様子 コミュニケーション場面での様子について質問や意見が多く出され、地域での教育課題として、児童生徒のコミュニケーション力育成の重要性が認識されていた。タブレット端末の活用においては、導入後の授業研究会で あり、これからの活用促進を促す好事例となった。 (6) 講話・助言 授業研究会後半には、授業を参観した感想を中心にした講話を行った。 また、協働的な学びをどのように展開すると良いかも助言するようにした。
研修開催後についてのアクション	研修後に、教師向けアンケートを回答してもらい、研修への評価を実施するようにした。これらの研修評価の結果を受けて、今後必要となる手立てを検討していく必要がある。 研究授業の様子を映像で記録するようにしており、授業者を含め、学校現場で振り返る機会を設けるようにしたい。また、コミュニケーション力育成の重要性を学校や地域全体で共通理解できるように、啓発活動を継続して取り組むようにする。

4. 学習教材開発

過去、平成22年度から平成24年までの3年間を通じてコミュニケーション力を育成するための授業例を中心としてまとめた教材（研修モジュール）を開発した。今回は、学校や地域での研修会で実施したりしてきた21世紀型コミュニケーションを育成するツールとしてのタブレット端末、ホワイトボード、思考ツールのマッピングをもとに、その活用効果や授業での活用における留意点について深めていった。開発した教材（研修モジュール）は、以下の構成となっている。

図表15 学習教材（研修モジュール）の内容

	タイトル	構成
A	ブレインストーミング・KJ法 モジュール	参加型の学習方法である「ブレインストーミング」及び「KJ法」を体験するワークショップ
B	イメージマップ モジュール	イメージマップの基本から応用までを体験するワークショップ
C	ホワイトボード モジュール	21世紀型コミュニケーション力とは何かを理解し、ホワイトボードの特性を体験するワークショップ
D	タブレット端末 モジュール	タブレット端末のツールとしての特徴を理解し、その活用バリエーションの充実を目指す

5. 成果発表会

当事業の活動内容を広く広報するために、平成27年度 JAPET&CEC 教育の情報化推進フォーラムにおいて「授業におけるコミュニケーションツールの活用 ～タブレット端末、ホワイトボード、マッピングをもとに～」と題して分科会Ⅱを開催した。

分科会の概要は以下の通りである。

- ・開催日時 平成28年 3月 5日 9時30分～10時40分
 - ・国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟
 - ・来場者数 パネル討論参加者 150名
- | | | | |
|---------|-------------|----|-------|
| コーディネータ | 放送大学 | 教授 | 中川 一史 |
| パネリスト | 金沢星稜大学 | 教授 | 佐藤 幸江 |
| | 鹿児島大学 | 講師 | 山本 朋弘 |
| | 船橋市総合教育センター | 所長 | 秋元 大輔 |

図表16 成果発表会の様子・趣旨説明



図表17 成果発表会の様子 パネル討論



6. まとめ

本研修は、「ICT社会におけるコミュニケーション力の育成」を、学習活動の中にどのように取り込んでいくか、その取組を支援する研修を企画しました。

今年度は、全国教育委員会や学校において、8ヵ所15回開催しました。

第一回目の研修で、コミュニケーションツールを活用したワークショップを実際に体験し、第二回目の研修で、一回目の研修で習得したコミュニケーションツールを活用した授業を実践した。

授業後、校内研究会として授業者と学校内の先生方で授業検討会を開き、その中でもブレインストーミングやKJ法を用いて、良かった子点、課題となった点、また、その改善点等忌憚のない意見が多数あがった。詳細は、前述の3項(2)セミナー開催団体の所感を参照していただきたい。

また、受講された教育委員会／学校に対し、受講者のアンケートとは別に、以下の3点を記述式で回答してもらった。

1. 研修の狙い
2. 考察
3. 研修開催後についてのアクション
(研修開催後に、どのように研修内容を活かしたのか)

研修の狙いで一番多かったのは、「子どもたちのコミュニケーション能力を育成していくには、コミュニケーションツールを実際の授業でどのように活用していくのか」という課題だった。

また、考察の中では、

- ・模擬授業の内容について、ワークショップ形式で協議が行われた。手法としては、ブレインストーミングとKJ法を併せて用いた。具体的には、ワークショップ研修モジュールを用い、「思考力・表現力の育成を図るICT活用について」というテーマを共有した。次に、基本ルールと進め方を理解し、KJ法を用いて模擬授業の内容について意見を交流した。複数の班に発表してもらい、それぞれの良さを共有するようにした。この研修により、コミュニケーション力の育成を図る授業の展開について具体的事例をもとに考えを深めることができた。
- ・協調的レベルから主張的レベルに段階的に指導を行うことで、協働的な学びの質を向上させることができることを学んだ。児童の発達段階を考慮して、系統的・計画的にコミュニケーション力の育成を図る指導の充実を図る必要がある。
- ・タブレット端末の活用では、主な行事等の写真を見られるように、決まったイメージマップを写真にとり、全体共有する場面で活用した。
- ・イメージマップに関しては、観点が広がったことでイメージが広がった、という意見と逆に広がり制限された、という意見もあり、何をどう書かせるかねらいをしっかりと定めて書かせることが大切だと思った。
- ・イメージマップを書かせた後、一人→二人ペアと意見を広げ、その後グループで3項目に絞る話し合いをしたが、3つに限定することで、グループでの話し合いが活発になっていた。コミュニケーションを活性化させるために限定することは手だてとして有効だった。
- ・タブレット端末は導入されてはいるが、まだ不安をもっている職員もたくさんおり、ワークショップでも不安の声がたくさん聞かれた。授業場面を通して活用イメージを広げ、ミニ研修などでスキルアップを図っていきたい。
- ・ワークショップを受けて、イメージマップの拡散的思考と集中的思考について、段階制について、共有のレベルについて、タブレット端末の成功例、失敗例など詳しく話をしていただいたので、参加者からもイメージマップでの活用イメージが広がり大変参考になったという感想が多数あがった。今後の授業に活かしていきたい。

- ・一斉授業を中心に行っていた本校の授業形態を、班単位・グループ単位にして活動をする方が、コミュニケーション力を高める際に有効であること、その際に思考ツールとしての付箋をもちいることが、コミュニケーション力を高めることにつながることで、理論的に理解できた点が良かった。

といった考察がされており、今後実際の21世紀型コミュニケーション力育成のための授業につながっていくと思われる。

7. 継続とさらなる定着

学習活動へのさらなる定着をするために、具体的な授業提案をサポートする「授業マイスター」を選定し、研修後の授業提案や授業実践を全面的にサポートしていく内容を検討中である。

10種類の研修モジュールと6種類のコミュニケーションツールの研修コンテンツを公開してきたが、現場で活用が多い「KJ法」「イメージマップ」「ホワイトボード」「タブレット端末」の4つに絞り、内容をさらに充実させていきたいと検討中である。

また、1月15日に開催した福岡セミナーにおいては、広域の活動を見据えて、記念講演・模擬授業・ワークショップ・パネル討論といったプログラムで試験的にセミナーを実施し、100名近い受講者が参加し好評を得た。

広域の活動とは、教育委員会開催の会場では教育委員会の職掌範囲の教員しか受講できない、しかし、当会が主催者となることで、域内を超えたより多くの教員がセミナーに参加することが可能となることから、積極的に取り組み更なる定着を目指す。

8. 学会への研究発表

本事業による研究成果を日本教育メディア学会で発表を行った。コミュニケーション力育成のための要因分析結果、「共感・納得」、「主張・納得」の2つが抽出できたこと、この「共感・納得」、「主張・納得」を明確にした授業が重要であるということが報告された。

第3章

ネットの使いすぎ撲滅のための事業

1. 事業の目的

現在、日本人の9割がネットを利用する時代である。とくに10代、20代のネット利用率は100%に近い。ネットは様々なデバイスで利用されているが、とくに若年層ではモバイル機器(従来型携帯電話、スマートフォン)による利用時間が長く、10代の89%、20代の63%がモバイル機器を通じたものである(「日本人の情報行動2015年調査」※1)。とくにスマートフォンの普及はめざましく、10代で81%、20代で92%が利用している。

スマートフォンはネットへの接続が容易で、機器の普及とともにネット利用時間が増加している。前述の調査によれば、10代20代とも1日のネットの利用時間はテレビを上回る。

若年層のネット利用の中心はメールやソーシャルメディアなどの「コミュニケーション系」であり、ネット全利用時間の半分以上がこれに当てられている。若年層の大半はソーシャルメディアサービスの一つLINEの利用者でもあり、10代の79%、20代の87%が利用者である。

ネット利用時間の増加、ソーシャルメディアの普及とともに、過剰な時間、ネットで友人等とのやりとりをおこない、睡眠時間が減少するなど生活が乱れたり、家庭や学校、会社での人間関係にもほころびが出たりするケースが生じている。我々はこうしたソーシャルメディアの過剰利用に起因するネット依存を「つながり依存」と名付けた。

ネット依存傾向の判断にあたってはいくつかの基準が提起されている。学術的にも最も広く利用されているのは、アメリカの心理学者キンバリー・ヤングが提唱した「ヤング基準」である。ヤング基準にも8項目版や20項目版など、いくつかのバリエーションがあるが、原型が作られたのが1990年代の末であり、当時のネット環境と現在のネット環境には大きな相違がある。当時はパソコンによる利用が中心で、ネットの利用率も今よりかなり低く、ネット利用がいわば特殊な行為であった。現在は日米とも国民の大半がネットを利用しており、スマートフォンの普及は、ネット利用を日常的なものにした。むしろ四六時中ネットに接続しているのがさほど異常な状態でもなくなった。また、ヤングの基準が提唱された時代には、まだ現在で言うソーシャルメディアは普及しておらず、動画も閲覧できなかった。当時の「ネット依存」はオンラインゲームやサイトの継続的閲覧を念頭においたものであり、基本的には我々の言う「つながり依存」を対象としていない。とくに日本では、若年層においてLINE等のソーシャルメディアの過剰利用が問題になっているが、LINEのサービス開始は2011年である。

従来のネット依存の基準が現状の若年層のネット利用の実態と必ずしも合うものでなく、とくにつながり依存を判断するスケールになっていないところから、我々の委員会では、様々なタイプの依存状況を弁別でき、とくにつながり依存をチェックする基準作りを試みた。また、中学や高校の現場で基準試案を実践的に適用し、その基準の信頼性・妥当性を検証した。

※1 「日本人の情報行動調査」は全国13歳から69歳の男女が対象で、層化2段無作為抽出、訪問留置調査による。2015年調査は有効回収数1,362票、2015年6月に実施。

2. 作業項目とスケジュール／作業体制

(1) 作業項目とスケジュール

作業項目とスケジュールは下記の通りである。

図表1 作業スケジュール

作業項目	平成27年									平成28年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
委員会開催	▼① 3							▼② 6		▼③ 7		
弁別指標開発			▲						▼			
学習教材開発				▲								▼
成果発表会												▼ 4

(2) 委員会の設置

本事業では有識者で構成する「オンライン・ベターライフ促進委員会」を組織して作業に取り組んだ。この委員会は、作業スケジュールの策定、弁別指標の開発、学習教材の開発、成果発表会での報告等、本事業の全体を管理した。

また、弁別指標の妥当性確認のためのアンケート結果のデータ化、コンテンツ開発の実作業等は事務局が担当した。

図表2 委員一覧（顧問／委員長以外は五十音順）

所属	役職及び氏名	
一般社団法人 日本教育情報化振興会	会長	赤堀 侃司（顧問）
東京大学	教授	橋元 良明（委員長）
エンジェルズ・アイズ	代表	遠藤 美季
一般社団法人 インターネットユーザ協会	代表理事	小寺 信良
筑波大学	教授	土井 隆義
千葉大学教育学部附属中学校	主幹教諭	三宅 健次
帝京中学・高等学校	教諭	三輪 清隆
東京大学大学院学際情報学府	博士課程	堀川 裕介

図表3 事務局等の体制

所属	役職及び氏名	役割
一般社団法人 日本教育情報化振興会	専務理事 鶴田 雅文	責任者
同上	事務局 吉田 真和	総括
同上	普及促進部 担当部長 中沢 研也	アンケート集計
同上	調査研究開発部 シニアエキスパート 宮原 克彦	アンケート集計
同上	総務部 総務担当部長 赤松伊佐代	J K A対応
株式会社ユーミックス	代表取締役 藤田由美子	学習教材開発
同上	小野 咲子	学習教材開発
株式会社 工画堂スタジオ	ディレクター 門野 孝介	学習教材開発
株式会社コドモット	代表 渡邊 純子	学習教材開発

(3) 委員会の開催

委員会は3～4カ月に1回の開催を基本としたが、検討すべき議題に応じて適宜日程を前後させた。また、急を要する場合にはメールによる検討・決議を行った。年度を通じて計3回の委員会を開催したが、それぞれの開催日、議題は下記の通りである。

図表4 委員会開催実績

開催回数	開催日	議題
第一回	27. 4. 3	・委員会開催予定 ・セミナー開催地公募 ・セミナー用テキスト開発 ・セミナー開催地の採択 ・大規模調査アンケートの実施について ・大規模調査アンケートのデータに対する因子分析等の検証について ・学習教材開発の検討について ・その他
第二回	27. 11. 6	・大規模調査アンケートの結果と分析について ・学習教材開発の検討について ・その他
第三回	28. 1. 7	・新規コンテンツ案について ・報告書執筆(案)について ・教育の情報化推進フォーラムについて ・その他

3. 指標作成の経緯

東京大学 橋元 良明

本委員会は当初一般財団法人コンピュータ教育推進センター（CEC）内に「ネットのベターユース促進検討委員会（仮称）」として設置され、2013 年 10 月に第 1 回委員会が開催された（当初の委員長は赤堀侃司氏。2014 年度から橋元良明に交代）。

発足から委員会の事業目的は、つながり依存の実態を把握し、そこから脱却して様々な社会的な課題を考え、グローバルに情報発信する力を養うためのプログラムおよびコンテンツを作成することであった。

2014 年度には委員会の正式名称を「オンライン・ベターライフ促進委員会」と定め、(1)「つながり依存」識別指標、(2)指標に基づく学習教材の開発を事業目的とした。ここではとくに(1)について概要を記述する。

まず、ネット依存の構成概念について整理し、東京大学橋元研究室で実施してきたアンケート調査や他の先行研究で用いられたネット依存関連の質問項目 100 余りを意味内容に即して整理分類した。また、今回は中高生を対象者としているため、千葉大学教育学部附属中学校と帝京高等学校の協力を得て、生徒が考えるネット依存のイメージを洗い出し、新たに依存識別質問項目も追加した。

指標作成の具体的プロセス、データ分析等については第 3 章で詳述するが、基本的には、ネット依存に関して現在のネット利用環境に適切な 20 項目前後の質問項目に整理し、それらに対する回答結果に従って、「つながり依存度」「ゲーム依存度」「コンテンツ依存」の 3 種類の依存傾向を識別可能な指標を作成した。

4. 「つながり依存」の社会背景

筑波大学 土井隆義

(1) 常時接続を煽る不安

一般にネット依存というと、オンラインゲームや投稿動画などの快楽から抜け出せないケースを想像するだろう。しかし、ネット依存に陥っている中高生の多くが抜け出せないでいるのは、このようなコンテンツ系サービスではない。もちろん、それが皆無とはいわないが、現実にはSNSのようなコミュニケーション系サービスの場合がほとんどである。しかも、その相手の多くは現実の世界で学校生活を共に送っている仲間である。

このようなコミュニケーション系サービスへの依存者の多くがネットへの接続を切断できないのは、コンテンツ系サービスへの依存のような快楽に押し流されてのことではない。もちろん、つながり続けることに快楽の要素がまったくないとはいわないが、日々ネット機器を使いつづけ、ネットへの常時接続にやがて疲弊感が募っていても、その時にはもはやネット機器を手放せなくなってしまうのは、むしろ不安の強さからなのである。

(2) 流動化する人間関係

今日の若者の間では、人間関係を築く際の制度的要因の比重が減り、個人的要因の比重が増えている。その結果、友人数の多寡によって人間の価値が決まるかのような風潮が広がりつつある。また、友人数が多い者ほど自己肯定感が高く、自分の将来も明るいと考える傾向も強まっている。そのため、友人関係をリスクとみなす傾向も強まっている。従来のように組織や制度によって人間関係がきつく縛られなくなったということは、裏を返せば、制度によって関係が保証されなくなったことでもあるからである。

このような人間関係の流動化が及ぼす影響は、内閣府が実施している青年意識調査にも表われている。この調査によると、友人関係に充実感を覚える若者は1970年代から増えつつけている。人間関係の自由度が増した結果、既存の制度や組織によって不本意な人間関係のかつてほど強制されなくなったからだろう。たとえ同じクラスや部活の一員であっても、気が合わなければ無理して付きあう必要などない。付きあう相手は自分の好みで自由に選べばよい。そう考える若者は、かつてより増えていると思われる。

ところが、友人関係に対する充実感が増すにつれて、そこに悩みや心配ごとを感じる若者は一時的に減少していたものの、2000年代に入るとその傾向が反転し、再び増えはじめている。おそらく人間関係に対する不満が減ってきた裏側で、今度はそこに強い不安を覚えるようになったからだろう。相手を選ぶ自由は、相手から選んでもらえないかもしれないリスクと表裏一体だからである。この時期に、関係への不満の減少分を関係への不安の増大分が凌駕するほど、現実の人間関係が不安定化してきたのである。

(3) 高まる自己承認欲求

今日の若者たちが既存の組織や制度にさほど強く縛られなくなり、人間関係の流動性が高まってきたのは、そもそも価値観の多様化が進んだからである。それだけ選択の自由度が増したわけだが、しかしそれは他方で、さまざまな選択肢を横並びにし、かつてのように安定した判断基準を個々人が内面に抱くことを難しくもさせてきた。

今日のように多くの選択肢が横並びになると、どれを選択してもそこに普遍的な根拠を見出すことが難しくなる。自分の選択に少しでも不具合が生ずると、たちまち不安に陥ってしまう。そのため現代人は、相当の年齢になってからでも評価の物差しを周囲からの反応に求めざるをえなくなっている。その承認を得ることで、自分の選択を安定させようとするのである。もとより自分の生き方をこれから模索していかなければならない若者にとって、仲間からの評価は大人以上に重さを持っているが、近年はその傾向にさらに拍車がかかっているのである。

欧米のような一神教の国でもなく、また世間からの評価も安定性と一元性を失った現在の日本では、自分を評価してくれる仲間の存在こそが、自尊感情を支える上での最大の基盤であり、またその仲間からの反応こそが、自らの態度決定に有効な羅針盤であると感じられるようになっている。だから、その関係が損なわれることに対して強い不安を覚え、ネットを媒介とした人間関係への常時接続からも逃れづらくなっているのである。

(4)内閉化する生活世界

今日の中高生たちの生活世界は、ネットの普及によって広がったわけではなく、むしろ逆に狭まっている。ごく狭い人間関係をさらに濃密にする道具として、ネットが駆使されている。そのため、その関係にしか抛り所を見出せず、依存度が過度に強まっている。だとすれば、外部とのつながりを遮断する禁止策によってではなく、逆につながりを増やす促進策によってこそ、ネット依存からの解放も可能となるはずである。ネットの世界は危険が多いからと接続を遮断し、狭い世界へ囲い込むことでは、問題は解決しない。

いま必要なことは、日常の場面で広く多彩な人間関係を紡ぎやすい仕組みを構築していくことである。そのツールとしてネットも活用してこそ、ネット依存からの脱却を果たせるだろう。現在の学校は、目先のトラブルの事前回避に気を取られて、あまりに閉鎖的になりすぎているように見受けられる。しかし、ネット依存の本質的な問題は、ネット自体の開放性にあるのではなく、むしろ日常の人間関係の閉鎖性にこそある。私たちは、そのことに早く気づき、彼らの関係を開かせる有効な対策を考えていかねばならない。

5. 学校現場の現状と指導案（指導のポイント）

(1) 千葉大学教育学部附属中学校（三宅 健次）

平成 27 年 11 月 9 日から 10 日にかけて、中学 1 年生 144 名を対象に、以下のようなインターネット利用に関するアンケートを行った。

アンケートは、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の 4 択で、それぞれ 1～4 の点をあてた。したがって、1 に近いほどネット依存傾向が強いことになる。

図表 5 アンケート結果

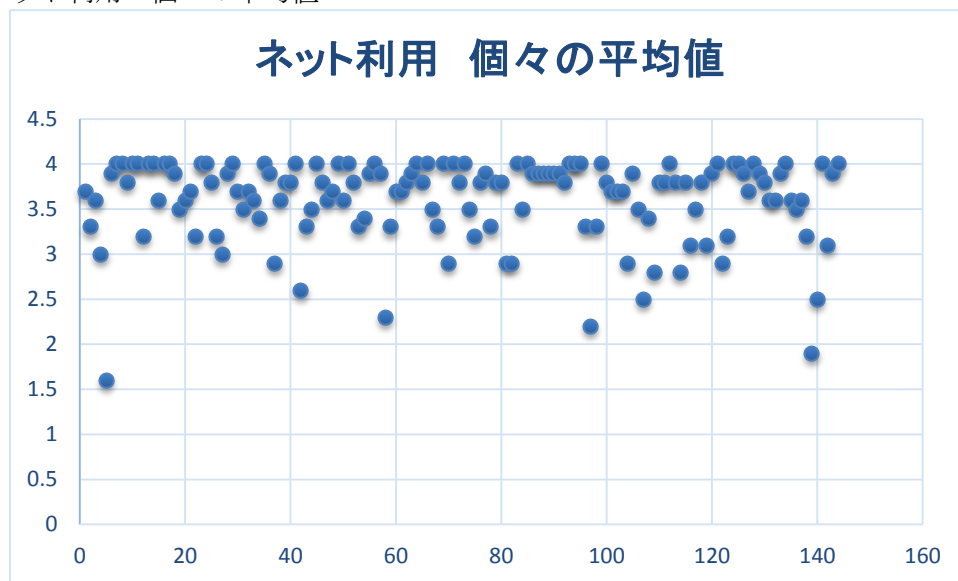
	平均値	1 の人数
1. 友だちからのネット上のメッセージにはどんな時でもすぐに返信する	2.9	9
2. ネットでやり取りしているとき、相手からのメッセージの返信が遅いとイライラする	3.6	1
3. 他のことをしているときでも、ネットにどんな話題を投稿しようかということばかり考えている	3.9	1
4. 友だちからのメッセージが気がかりでネットを常に確認している	3.6	3
5. 仲間はずれにされたくないので、気が乗らないときでもネットで友だちとやり取りするのをやめられない	3.8	1
6. ネットをしている時が一番安心する	3.6	5
7. 友だちと過ごすよりネットをしたいと思うことがある	3.7	4
8. 外で遊んだり課外活動に行ったりするよりも、家でネットを楽しみたい	3.7	2
9. ネット上のアプリやコンテンツ(ゲーム、音楽、スタンプなど)に課金することがよくある	3.8	2
10. 他にやるべきことがあってもネットをやめられない	3.5	6
11. ネットをしていて、気がつくとなかなり時間がたっている	2.9	24
12. 外へ遊びに行くよりも、家でネットを楽しみたい	3.6	5
13. 現実世界の嫌なことを忘れるためにネットをしている	3.6	4
14. ネットをしている最中に邪魔されるとキレそうになることがある	3.8	2
15. 起きている間中、ずっとネットをしている	3.7	3
16. 誰かと話している最中でもネットをしている	3.8	5
17. 風呂やトイレでもネットをしている	3.7	2
18. 歩いている最中でもネットをしている	3.5	11
19. あと少しと思いながら深夜までネットをしてしまい、寝る時間が少なくなることが多い	3.7	1
20. 学校の成績が下がった原因はネットのやりすぎではないかと思う	3.2	9

アンケート 20 項目の全体平均値は 3.6 を示した。したがって、全体的な傾向としては現時点でネット依存傾向に陥っている生徒は少ないといえる。

その中で、平均値が 2 点台と低かったのが、項目 1「友だちからのネット上のメッセージにはどんな時でもすぐに返信する」及び項目 11「ネットをしていて、気がつくとかかなり時間がたっている」であった。前者はつながり依存に陥る典型的な事象である。後者は、つながり依存だけではなく、コンテンツ依存やゲーム依存にもあてはまる。この項目に関しては「あてはまる」と回答した生徒が 24 人もおり、飛び抜けて多かった。このような事例に関しては、一定の時間連続使用していると、警告音が鳴ったり、メッセージが出たりするような仕掛け（アプリ等）が開発されると効果的ではないかと考える。

ネット依存に関しては、全体的な傾向よりも、個々に分析していった方が現実的である。そこで、このアンケートを個々に分析してみた。

図表 6 ネット利用 個々の平均値



概ね 3 点台後半を示している中で、2 点以下の生徒が 2 名いた。最も低い数値の 1.6 であった生徒は 13 項目「あてはまる」と回答しており、完全にネット依存に陥っている症状を見せていた。どこまでをネット依存及びネット依存予備軍とするかは検討の余地がある。仮に 2 点以下をネット依存、3 点以下をネット依存予備軍とすると、本校の場合、2 名がネット依存、11 名がネット依存予備軍ということになる。

ネット依存のアンケートは心理学テストなどと異なり、実施する前からだいたいの予想はつくものである。ネットをほとんど利用していない生徒にとっては、項目を丁寧に確認しなくても「あてはまらない」と回答する場合が多い。本校においても 25 名の生徒が全て「あてはまらない」と回答していた。一方、ネットをよく利用している生徒は、少なからず依存傾向にあることは認識しているようである。したがって、アンケートを実施する際のモチベーションは決して高いとはいえない。

ただ、ネット依存などの依存症に関しては、依存症になってから対処するよりも、依存症になる前のはたらきかけが重要となる。そこで折に触れて、このようなアンケートは必要ではないかと考える。

また、依存傾向があるとの結果が出た生徒に対して、今後どのようにコントロールしたらよいのか、具体的な行動指標などが示せればよいのではないかと考える。

(2) 帝京高校（三輪 清隆）

①「ネット依存診断」高等学校での必要性

高校生にとってスマホはもっとも身近にあるものの一つであり、スマホをいじらないで生活することが難しくなっている。スマホのある生活スタイルは、今どきの高校生の一日の過ごし方を変えているようにも思われる。何人もの子どもたちにインタビューしたが、典型的な一日の生活を紹介すると、朝の通学時間帯には友人との会話（SNS を通じて）もしくは、動画サイトの閲覧、音楽を聴く（一部生徒はインターネットを通じての聞き放題サービスを利用）している。学校にいる間は利用禁止。放課後は、複数の SNS を通じて情報共有（コメントのやり取りではなく、一方的に流されてきた情報を見るだけでも含む）、動画サイトの閲覧など。家庭では夕食後はテレビを見るよりも、スマホをいじることが多い。スマホを利用する動機は、「暇つぶし」にあるようにも感じられる。暇な時間が少しでもあるとスマホを利用するという習慣が、やがてネット依存につながる危険性がある。

②ネット依存にならないために

授業（特に「情報」）では、ネット依存について講義はするが、知識として学習することが多く、自らがネット依存であるかどうかまでは踏み込まない。また、多くの場合、ネット依存傾向が高いかどうかは意識していないようだ。今回の事業の一環として、生徒同士のグループでネット依存についてのボーダーラインを話し合ってもらったが、その際に個々の生徒が感じるネット依存の度合いに多少の違いがあることが分かった。そして、その過程で自らのネット依存傾向の強さを意識する生徒がいたことは興味深い。今回の事業で開発された依存度診断は、子供たちに数値として依存傾向を提示することができ、より具体的に自らの依存傾向を把握してもらえるようになった。調査に参加してもらった生徒の感想文を読むと、依存傾向に気を付けなければいけないとの感想が多かった。

③今後

スマホの利用は教育の ICT 化が進むと増加することが予想されるが、ネット依存症にならないような利用の仕方を指導していく必要が求められる。そのためにも、今回の事業成果を発展させて利用していきたいと思う。

6. 子どもたち、保護者の現状

エンジェル・アイズ 遠藤 美季

ネット社会の急速な変化の中で、ICT スキルだけではなく、コミュニケーション能力、想像力、社会の変化への対応力の向上がより求められているにも関わらず、子どもたちの多くは、趣味嗜好のため、暇つぶしのため、また友達同士で承認し合い、人間関係に保険をつくるなど、自分の居場所づくりのためにネットに夢中になっているきらいがあります。

連絡手段や日常会話に LINE や SNS の利用が普及していくにつれ、子どもたちの日常生活やコミュニケーションは大きな変化が起きています。LINE においては学校内で「LINE 縛り」ともいえるような関係性に陥り、より複雑なコミュニケーションが求められ、主体的にネットの接続をすることの妨げになっています。人との協調性を重視という面で必要に迫られる場合もあるのですが、行き過ぎた協調性が多くの意見に同調するという性格に替わってしまう場合もあり、実生活の中でも主体的に物事を考え行動することが不得手になっている子どもも増えているようです。すべてのグループにおいてではありませんが、その影響はリーダーとなる存在を欠き、人との約束や物事の計画性という点でもその力が劣えさせていると感じることがあります。主体的に物事が決められないことがまた LINE のようなコミュニケーションアプリへの依存につながり、マイナスのスパイラルに陥ってしまいます。

またネット上の友達（ネッ友）との関係の中では、自分が中心となってネッ友との関係を築いていきますが、ある時点になるとネッ友が自分から離れることを恐れ相手に自分を合わせたり、ネッ友の期待に応えるようにネットを接続している子もいます。

子どもの中には家族と安心できる関係が築けていない場合や思春期のように自分が混乱している中で、知らず SNS の中での人間関係が自分の唯一の生きる居場所になってしまっている子もいます。

依存の背景には複雑な生活環境やリアルな人との関係が色濃く反映されているため「つながり依存」の改善にいたるにはモノやアプリの利用制限やルール作りでは簡単に改善につながらないという問題があります。

人間付き合いに疲弊して、本来学生時代にしておくべき勉強やスポーツがおざなりになってしまったり、健全なコミュニケーションの機会が失われてしまうのは、育ちに大きな影響を与えることになってしまうため問題の早期解決が求められますが様々な状況を踏まえると容易ではありません。

シングルの家庭や共働きなど、親に余裕がない場合やネットモラルや依存などの知識を持たないのは、子どものネット利用にまで関心を持つことが難しい場合もあります。また学校でも子どもたちのネット利用の指導に明るくない教員にその対応を求めることは難しく、企業、行政、地域など社会全体での取り組みの意識が高まらなければ、解決は難しいと感じます。

ただ、一方で、SNS とは程よい関係でいられる生徒も増えていっています。やるべきことの優先順位が理解できていたり、自分を大切に思えたり、ストレス発散を運動などで解消していたり、SNS でのつながりにも「自分なりのルール」を作っていて「つながり依存」に陥ることがありません。

SNS にハマる子と、ほどほどに利用できる子との間では様々な点で今後は格差が広がっていくと思われます。

またすぐに対応していかななくてはならない問題のひとつに、保護者の SNS 利用の問題があります。乳幼児～中学生の保護者の中でも、子どもとほとんど変わりなく「LINE 縛り」や SNS 利用が影響する「つながり依存」の状況に陥る人が増えています。保護者のつながりが、子どもの学校生活への影響もあるため、子どもより問題が大きくなることもあるようです。大人自身がしっかりした考え方にに基づき SNS を利用する意識付けが必要です。

他に保護者が自身の不満や悩みを SNS で話、そこに憩いの「つながり」ができ依存状況に陥ることもあります。そのような親を持つ子がスマホを手に入ればおのずとネットの世界にのめり込んでしまうという負のスパイラルに陥りがちです。

つながりに依存しやすくなった背景には、スマートフォンやゲーム機等のモバイル機器の普及があります。今後ウェアラブル端末など機器の変化が急速に進む中、ネットリテラシーの向上や同時に快適な人間関係のありかた、その他社会のしくみについてなど多くの事を学ぶ教育環境づくりに積極的に取り組む必要があります。人とのネットワークのみが中心となるネット利用になる偏らないような教育が必要です。今は情報機器の扱いや新しい学びに多くの注目が集まっています。と同時にやらなくてはならない、教育や情報モラルと関連して社会生活におけるモラルについての学びも指導の対象にしていく必要があります。ネットの一般常識を学ぶ機会は小学校から必要だと感じます。その中では心身への健康に与える影響を考えバランス良いネット利用も身に着けることの意識付けも必要です。

今後ますますリアルな生活での友達や家庭内での個々の孤立する割合が高くなっていくとネット利用時間はさらに長時間化していき、不健康な状態に陥る人も増えていくため、視力・体力の低下、内臓や脳への影響も懸念されます。ネット依存の多くは「つながり依存」とも言えますが、ネット利用の見直し、改善のためには、自分自身の認知が必要で、そのためには精神科だけに頼らず、オンラインゲーム依存を除く「ネット依存」を「生・活習慣病」と捉え、眼科、口腔外科、内科、小児科、整体などあらゆる医療機関での治療対象として、早期の認知できる機会を増やしていく取り組みも早急に対応していくことも検討していくべきです。

現在の子どもたちが成長したときには、ネットスキルの格差がさらに顕著に表れ、仕事だけでなく、恋愛スタイルや家族や家庭のあり方も多様化していき混乱が予想されます。混乱が長引くと、日本社会としての力も低下していき、今後さらに少子化、年金問題、子育て、人手不足に拍車がかかり生活保護世帯も増えていくことが懸念されます。一方それらを支える人々への負担も重くなっていき生きづらい社会になります。それを避けるための手段としての教育の在り方も考える必要があります。

7. 「つながり依存」の識別指標の開発

東京大学大学院学際情報学府 博士課程 堀川裕介

7-1. 「つながり依存」識別指標の概要

JAPET&CEC オンラインベターライフ促進委員会では、2014 年度・2015 年度事業の一環として「つながり依存」識別指標（以下「指標」）の開発を行った。これはいわゆる「ネット依存」で昨今問題となっている「つながり依存²⁾」を、「ゲーム依存³⁾」「コンテンツ依存⁴⁾」と区別しつつ同時に測定できる指標を作成するものである。本指標はウェブ上で使用可能な「つながりチェッカー」としてツール化し、教育現場などにおいて生徒が手軽に自身のネット依存状況を確認できるものにすることを目指した。

7-2. 指標の基本設計

(1) 学術的根拠のある既存の指標・基準をベースに

指標の設計に当たっては、一定の学術的根拠を有することを一つの要件とした。世間一般に出回っているチェックリスト的なものの中にもネット依存の様相をよくとらえているものはあるが、学術的な検証を経ていないものが多いため、あくまでネット依存に対する世間一般のイメージを表す程度のものとして扱うほかない。これに対し、米国でネット依存研究の先鞭をつけたヤング博士の 8 項目基準⁵⁾、20 項目基準⁶⁾は、多くの学術研究で妥当性が検証され、最新の DSM-V⁷⁾に掲載された「インターネットゲーム障害」の基準と共通する点が多いなど、信頼性の高い基準と言える。したがって本指標もヤング基準をベースに作成することとした。しかしヤング基準にも若干の課題がある。一つにはインターネット利用の中身を特に区別していないため、そのままでは 3 種類の依存を区別する用途に利用できない点。もう一つは 1990 年代末の米国社会におけるネット依存を念頭に置いて作られた基準であるため、現代日本の青少年に適用するには、文言を分かりやすく改める、もはや逸脱的とは言えないような項目を省くといった微修正が必要な点である。

(2) 3 種類の依存を見分ける方法

前述の一つ目の課題を解決する方法、すなわちヤング基準のような指標を用いつつ 3 種類の依存を識別する方法として、筆者は指標とネット利用時間の関係に着目した。指標の一つ一つの項目を見ると様々な意味内容のものが含まれており、一言で「ネット依存」と書かれていても実態としてはつながり依存、ゲーム依存、コンテンツ依存のような特定タイプのネット依存と強く結びついていものが混在している可能性がある。

この時仮に、ソーシャルメディアの利用時間と高い相関関係にあり、ゲームやコンテンツサービスの利用時間とは相関関係がないような項目 A があったとする。「項目 A とソーシャルメディア利用時間の相関関係が高い」とは、ソーシャルメディア利用時間が長い人ほど項目 A に該当する割合が高くなることを意味している。そしてつながり依存に陥っている人の場合、ソーシャルメディア利用時間は通常長くなると考えられるため、「つながり依存の人ほど項目 A に該当する割合が高い」という関連が導き出される。そしてこの関連が成り立つならば、逆に「項目 A に該当する人はつながり依存に該当する可能性が高い」という推論も成り立つと考えられる。

²⁾ ソーシャルメディアやメールなどインターネット上のコミュニケーション手段の利用を介した他者とのコミュニケーションに対して過度にのめりこむタイプのネット依存を指す。

³⁾ オンラインゲームの利用にのめりこむタイプのネット依存を指す。

⁴⁾ 本指標では、動画サイトや文字情報サイト（ホームページ、ブログ等）など、受け身の閲覧が主な利用形態であるインターネット上のサイトの利用に対して過度にのめりこむタイプのネット依存を指すものとしてこの言葉を用いている。

⁵⁾ IADQ : Internet Addiction Diagnostic Questionnaire、Young(1998a)で提唱。

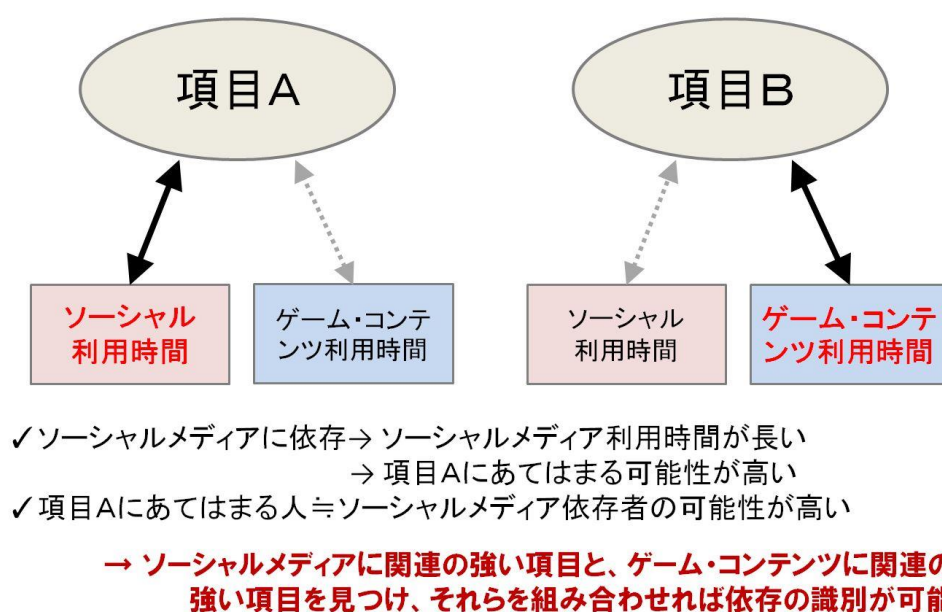
⁶⁾ IAT : Internet Addiction Test、Young(1998b)で提唱。

⁷⁾ 和名「精神疾患の診断・統計マニュアル第 5 版」。米国精神医学会が発行する精神疾患の診断分類。

このようにして一つ一つの項目がどのタイプのネット依存と関連するか明らかにし、3種類それぞれに対して関連の深い項目を組み合わせることで指標を構成する。そうすれば、つながり依存の人はそれと強く関連する項目を集中的に選び、ゲーム依存、コンテンツ依存の人は同様にそれらと関連の強い項目を集中的に選ぶことによって、ネット依存のタイプが識別可能になると考えられる。

本指標では上記の考え方にに基づき、ネット依存のタイプによって回答先が割れるような項目を組み合わせることで、ネット依存のタイプを見分けることとした。

図表7 ネット依存の「見分け」の考え方



(3) 現代日本の青少年に適した指標に

二つ目の課題、すなわちヤング基準などが念頭に置くネット依存のイメージが陳腐化している可能性への対処については、項目文の内容が現代日本の青少年にあてはめても特異な状況を指し、かつ彼らにとって平易に理解できる文章である必要がある。これをどう実現するかについては追って言及する。

(4) 指標の基本設計

複数の項目からなる指標群を作成する。それぞれの項目には、それに該当した場合どの程度の依存度が見込まれるか、つながり依存、ゲーム依存、コンテンツ依存のそれぞれについてあらかじめ得点を割り振っておく。利用者は項目にあてはまるか否かを「はい」「いいえ」の二択で回答し、「はい」と回答したものについて3種類の依存得点を積み上げる。しかし各指標に与えられた得点は、あくまで「この項目にあてはまる人は、××の利用時間が長いことから××依存である可能性が高い」との推測から導き出されたものであるため、現実にはその項目と関連の強いサービスを利用していなくても該当する余地を残している。そこでそういった想定外の回答の影響を補正するため、本指標では3種類のネット利用についてそれぞれ利用時間を尋ねることとした。利用時間を3種類それぞれについて「利用時間得点」として得点化し、項目群から導き出された依存得点の合計（これを本稿では「基礎得点」と呼ぶ）に掛け合わせる。これによって、例えばゲームを全くしないにもかかわらずゲームの基礎得点が高くなってしまった人は、利用時間得点「0」を掛けることで最終的に導き出される依存度を「0」に補正することができる。基礎得点と利用時間得点を掛け合わせたものを100点満点換算して最終的な依存度を算出する。

図表 8 指標の設計イメージ

	つながり	ゲーム	コンテンツ
1.	3点	0点	0点
2.	3点	0点	0点
3.	0点	3点	0点
4.	0点	3点	0点
5.	0点	0点	3点
6.	0点	0点	3点
基礎得点	6点	6点	6点
	×	×	×
利用時間得点	X点	Y点	Z点
	↓	↓	↓
依存度	6x点	6y点	6z点

7-3. 指標の作成過程（2014 年度の作業）

2014 年度は、上述の基本設計に基づいた指標の作成作業を行った。作成に当たっては次のステップを踏んだ。以降それぞれのステップについて詳述する。

- (1) 既存指標の整理・統廃合
- (2) 指標構成項目候補の抜粋
- (3) 項目と利用時間の関連検証
- (4) 仮指標の作成

(1) 既存指標の整理・統廃合

既存指標のうち、先行研究で最もよく用いられる指標を中心に意味内容に即した整理・統廃合を行った。主に用いた指標は図表 3 の通りである。また、既存指標で掘りきれない現代的なネット依存の状況を補うため、オンラインベターライフ促進委員会の三宅、三輪両委員の協力を仰ぎ、現役中学・高校生に行ったネット依存のイメージに関する自由記述調査の結果も併せて整理した。そして整理の結果、既存指標を大きく 7 つの意味内容に分類した。詳細は図表 4 の通りである。

図表 9 検討に用いた既存指標

指標名	出典	項目数	備考
IADQ:Internet Addiction Diagnostic Questionnaire	Young(1998a)	8 項目	邦訳は Young(1998b)の和書を参考
IAT:Internet Addiction Test	Young(1998b)	20 項目	邦訳は Young(1998b)の和書を参考
OCS:Online Cognitive Scale	Davis 他(2002)	36 項目	邦訳は筆者独自
GPIUS:Generalized Pathological Internet Use Scale	Caplan(2002)	15 項目	邦訳は筆者独自
東京大学橋元研ならびに筆者の独自質問	総務省情報通信政策研究所(2014)他	59 項目	

図表 10 既存指標の整理・統廃合結果

大分類	小分類	項目の例
長時間利用	時間感覚の喪失	・ 気がつくと、思ったより長い時間ネットをしていることがある ・ インターネットをしていると、時間の感覚がなくなる
	夜中まで	・ 夜遅くまでネットをすることが原因で、睡眠時間が短くなっている ・ あと少しと思いながらやめられず、眠れなくなってしまう
	1 日中	・ 起きている間中、ずっとスマートフォンでネットを利用している ・ 1 日中ネットを使っている
	ひきこもり	・ ネットのし過ぎが原因で、ひきこもり気味になっている ・ 部屋に引きこもってネットばかり見ている
自己コントロールの喪失	コントロール喪失	・ ネットをしているとき「あと数分だけ」と自分で言い訳していることがある ・ やらなければいけないことがあるのに、ネットを使ってしまう
	思考の占領	・ ネットをしていないときでも、ネットのことを考えてぼんやりしたり、ネットをしているところを空想したりすることがある ・ 気がつけば、また次のネット利用を楽しみにしていることがある
	イライラ	・ ネットをしている最中に誰かに邪魔されると、いらいらしたり、怒ったり、言い返したりすることがある
心理的依存	安心	・ ネットをしている時が、もっとも心地よい ・ ネットをしている時が、一番ほっとする ・ ネットをしていると、安らぎを感じる
	不安	・ ネットをしている時は何ともないが、ネットをしていない時はイライラしたり、憂うつな気持ちになったりする ・ ネットのない生活は、退屈で、むなしく、わびしいだろうと不安に思うことがある ・ インターネットができないとさびしい気持ちになる
	逃避	・ 日々の生活の問題から気をそらすために、ネットで時間を過ごすことがある ・ よく、嫌なことから逃れるためにネットを利用している
実害	学業面	・ ネットが原因で、勉強の能率に悪影響が出ることもある ・ ネットをしている時間が長くて、学校の成績が下がっている
	対人関係面	・ 家族や友だちと過ごすよりも、ネットを利用したいと思うことがある ・ 誰かと外出するより、ネットを利用することを選ぶことがある
	注意	・ 周りの人から、ネットを利用する時間や回数について文句を言われたことがある ・ ネットをしている時間や回数を、人に隠そうとすることがある
	課金	・ ネットに費やす金額が、だんだん増えている ・ オンラインゲームに多額の課金をしてしまう
ながら	会話中	・ 人と話している時に携帯をいじる ・ 友達といっているのに携帯をいじる
	風呂/トイレ	・ 風呂場や WC に（ケータイを）持ちこむ ・ お風呂でもメールしている ・ トイレの中でやっている
	歩き/自転車	・ 歩きスマホ ・ 歩きながらいじる ・ 自転車に乗りながら使う
つながり	即レス	・ メールや SNS のメッセージがきたらすぐに返信しなければいけないと思う ・ メールや SNS のメッセージを送った相手からすぐに返事がこないとさびしくなる
	多数の投稿	・ SNS での投稿がすごい多い ・ (ソーシャルメディアなどで) 小さいことをなんでもいう
	常時チェック	・ LINE や Twitter をずっと確認している人 ・ 無駄に通知を確認する
	不安	・ スマホ/ガラケーに電話やメール/SNS のメッセージがこないとさびしくなる ・ ネット上で友達とつながっていないと不安に思う
	つきあい	・ スマホ/ガラケーを持っていないと、友だちとのつきあいがうまくいかないと思う ・ インターネットを利用しないと、友人・知人の輪に加われないため
ネットライフへの依存	ネットだけが趣味	・ ネットのし過ぎが原因で、他の趣味に使う時間が少なくなっている ・ ネットのし過ぎが原因で、ショッピングや映画などに出かける機会が少なくなっている ・ ネット以外の事を楽しめなくなる

(2) 指標構成項目候補の抜粋

分類した中から、図表 4 の小分類一つにつき 1 項目ずつ指標構成項目の候補を抜粋した。抜粋に際しては「現代性」「識別性」「厳密性」の 3 点を判断基準とした。「現代性」は今日の一般的なネット利用に照らしてなお特異性があるかを文言の内容に照らして判断した。「識別性」は項目への該当率の多寡で判断し、過去のアンケート調査で回答者の該当率が 50%以上もしくは 10%未満の項目を不採用とした。これはあまりに該当者が多すぎるか少なすぎる場合、特異者を識別する指標としての有用性が低くなってしまうためである。「厳密性」は指示内容に曖昧な所がないか、ネット依存と関係ない面が無いかなどを文言の内容に照らして判断した。なおそれらを満たさないものでも、ヤング基準などで鍵となっている項目については採用した。抜粋の結果は図表 5 の通りである。

図表 1 1 指標項目候補の抜粋結果

指標項目の候補	出所
1. メールや SNS のメッセージがきたらすぐに返信しなければいけないと思う	橋元研調査
2. メールや SNS のメッセージを送った相手からすぐに返事がこないときさびしくなる	橋元研調査
3.(ソーシャルメディアなどで)小さいことをなんでもいう	中高生調査
4. LINE や Twitter を常に確認する	中高生調査
5. インターネットを利用しないと、友人・知人の輪に加われない	筆者調査
6. インターネットをしている時が、一番ほっとする	OCS
7. ネットをしていない時でも、ネットのことを考えてぼんやりしたり、ネットをしているところを空想することがよくある	IAT
8. 家族や友だちと過ごすよりも、ネットを利用したいと思うことがある	IAT
9. ネットのしすぎが原因で、ひきこもり気味になっている	橋元研調査
10. ネットに費やす金額が、だんだん増えている	筆者調査
11. やめたほうがいい場合でも、ネットをやめられない	OCS
12. 気がつくと、思っていたより長い時間ネットをしていることがある	IAT
13. 日々の生活の問題から気をそらすために、ネットで時間を過ごすことがある	IAT
14. ネットをしている最中に誰かに邪魔されると、いらいらしたり、怒ったり、言い返したりすることがある	IAT
15. 起きている間中、ずっとスマートフォンでネットを利用している	橋元研調査
16. 誰かと話している最中でもケータイをいじる	中高生調査
17. 風呂やトイレでもケータイをいじる	中高生調査
18. 歩いている最中や自転車を運転している最中でもケータイをいじる	中高生調査
19. 夜遅くまでネットをすることが原因で、睡眠時間が短くなっている	IAT
20. ネットをしている時は何ともないが、ネットをしていない時はイライラしたり、憂うつな気持ちになったりする	IAT
21. ネットをしている時間が長くて、学校の成績が下がっている	IAT
22. 周りの人から、ネットを利用する時間や回数について文句を言われたことがある	IAT
23. ネット以外の趣味や楽しみがない	中高生調査

(3) 項目と利用時間の関連検証

抜粋した候補のうち、東京大学橋元研究室や筆者が過去にアンケート調査で用いたことのある項目について、各項目とネット利用時間の関連を検証した。検証にあたっては重回帰分析を用いた。重回帰分析は一つの被説明変数を複数の説明変数による一次式としてモデル化する分析方法であり、説明変数相互の関連を加味しつつ被説明変数と真に関連する説明変数を明らかにすることができる。式の被説明変数と説明変数は図表 6 の通りである。なお統制変数として性別と年齢も重回帰式に加えた。

$$\text{各指標の回答} = \beta_1 \times \text{つながり利用時間} + \beta_2 \times \text{ゲーム利用時間} + \beta_3 \times \text{コンテンツ利用時間}$$

図表 1 2 重回帰式（略述）と変数の概要

	使用した変数	値の定義
被説明変数	各指標の回答	各指標に4段階もしくは5段階で回答したものについて、該当する方向の回答ほど値が大きくなるように数値化したもの。4段階なら1～4、5段階なら1～5の整数の値をとる。（データ元の調査により異なる）
説明変数	つながり利用時間	「ソーシャルメディアの書き込み」などの利用時間（分単位の実数、データ元の調査により文言はやや異なる）
	ゲーム利用時間	「オンラインゲーム」の利用時間（分単位の実数、データ元の調査により文言はやや異なる）
	コンテンツ利用時間	「動画サイトの閲覧」「ブログの閲覧」などの利用時間（分単位の実数、データ元の調査により文言はやや異なる）
統制変数	性別	男性を1、女性を0とするダミー変数
	年齢	実年齢の値

分析に用いたデータは図表 7 のアンケート調査で採取したものである。

図表 1 3 分析に用いたデータ元の調査の概要

	総務省/橋元研調査	筆者独自調査
調査主体	総務省情報通信政策研究所、東京大学橋元研究室	筆者
調査対象	東京都内の公立高校生徒	東京都在住、15～44 歳の男女
調査方法	無記名自記式の質問紙調査	調査会社によるウェブアンケート
調査時期	2014 年 1 月 7 日～同 1 月 31 日	2013 年 2 月 19 日～同 2 月 21 日
有効票	15,191 票	2,767 票
調査に含まれる指標	IAT、橋元研独自項目	IADQ、IAT、OCS、GPIUS、筆者独自項目

分析結果は図表 8 の通りである。関連の強さの判断には標準偏回帰係数について帰無仮説が成立する確率（危険率）の水準、すなわち有意水準を用いた。有意水準は一般的な学術上の慣例に従い 5%以上、5%未満、1%未満、0.1%未満の 4 段階で判定した。通常、危険率 5%以上の場合は被説明変数と説明変数の間に有意な関連は見られないものと判断し、危険率が下がるほど関連はより確かなものと判断する。図表中では有意水準はアスタリスクとその数で表示している。なお、総務省/橋元研調査のデータを用いた分析においては、すべての説明変数について 0.1%未満という高い有意水準が見られる項目が多々あったため、総務省/橋元研調査のデータによる分析において標準偏回帰係数が .10 未満のものは、依存度を配点する便宜上、有意水準を一段下げて 1%未満として扱った。

図表 1 4 重回帰分析の結果

	ネット利用時間(説明変数)		
	つながり	ゲーム	コンテンツ
1. メールや SNS のメッセージがきたらすぐに返信しなければいけないと思う	.12 *	-.05	.02
2. メールや SNS のメッセージを送った相手からすぐに返事がこないときびしくなる	.12 *	-.06	-.01
3.(ソーシャルメディアなどで)小さいことをなんでもいう	—	—	—
4. LINE や Twitter を常に確認する	—	—	—
5. インターネットを利用しないと、友人・知人の輪に加われない	.19 ***	-.03	-.06
6. インターネットをしている時が、一番ほっとする	.05	.15 **	.16 **
7. ネットをしていない時でも、ネットのことを考えてぼんやりしたり、ネットをしているところを空想することがよくある	.04 **	.11 ***	.10 ***
8. 家族や友だちと過ごすよりも、ネットを利用したいと思うことがある	.05 **	.12 ***	.16 ***
9. ネットのしすぎが原因で、ひきこもり気味になっている	.02	.10 ***	.14 ***
10. ネットに費やす金額が、だんだん増えている	.03 **	.10 ***	.06 **
11. やめたほうがいい場合でも、ネットをやめられない	.06	.18 ***	.14 **
12. 気がつくと、思っていたより長い時間ネットをしていることがある	.05 **	.06 **	.14 ***
13. 日々の生活の問題から気をそらすために、ネットで時間を過ごすことがある	.07 **	.05 **	.13 ***
14. ネットをしている最中に誰かに邪魔されると、いらいらしたり、怒ったり、言い返したりすることがある	.06 **	.08 **	.12 ***
15. 起きている間中、ずっとスマートフォンでネットを利用している	.23 ***	.10 ***	.13 ***
16. 誰かと話している最中でもケータイをいじる	—	—	—
17. 風呂やトイレでもケータイをいじる	—	—	—
18. 歩いている最中や自転車を運転している最中でもケータイをいじる	—	—	—
19. 夜遅くまでネットをすることが原因で、睡眠時間が短くなっている	.10 ***	.13 ***	.15 ***
20. ネットをしている時は何ともないが、ネットをしていない時はイライラしたり、憂うつな気持ちになったりする	.07 **	.04 **	.08 **
21. ネットをしている時間が長くて、学校の成績が下がっている	.05 **	.05 **	.06 **
22. 周りの人から、ネットを利用する時間や回数について文句を言われたことがある	.06 **	.08 **	.04 **
23. ネット以外の趣味や楽しみがない	—	—	—

※表側の被説明変数それぞれに対する、表頭の説明変数（3 種類のネット利用時間）の関連の強さを表示している。

※有意水準はアスタリスクで表示しており、*** 危険率 0.1%未満、** 危険率 1%未満、* 危険率 5%未満、無印は危険率 5%以上（関連無し）をそれぞれ表す。

※数値は重回帰分析の結果出てきた標準偏回帰係数である。値はすべて -1 から 1 の間をとる。

※「—」は調査で尋ねていないため分析ができなかった箇所を表す。

(4) 仮指標の作成

まず重回帰分析の結果を基に各項目の依存得点の配点を行った。有意水準を基準に、0.1%未満には3点、1%未満には2点、5%未満には1点、5%以上（有意な関連無し）には0点を割り振った。過去の調査で尋ねたことがなくデータ上の裏付けがない項目については、文言の内容からどのタイプの依存と関連するか判断し、関連すると判断した箇所には仮得点として一律に2点を配点した。

次にネット利用時間の尋ね方と配点を検討した。まず尋ね方であるが、つながり依存に関わるネットの利用は「人とメッセージのやり取りをする時間⁸⁾」、ゲーム依存に関わるネットの利用は「オンラインゲームをする時間」、コンテンツ依存に関わるネットの利用は「動画やブログなどを見る時間」として、それぞれ選択式で尋ねることとした。選択肢は、過去のアンケート調査における分布状況や現役中高生と日頃接している委員の意見を参考に、「0分」「1分以上30分未満」「30分以上1時間未満」「1時間以上2時間未満」「2時間以上4時間未満」「4時間以上」の6段階とし、得点化にあたっては「0分」を0点、「4時間以上」を5点とする整数の得点を与えた。

最後に文言の微修正を行った。候補に挙げた指標の多くは、学術性が過ぎる表現であったり指示内容に曖昧な所を残していたりしたため、委員間の討議により現役中高生にとって分かりやすい表現に改めた。この過程では、一部の項目で、厳密に見れば意味内容が変わってしまったものもあるが、文言の変更による影響は検証作業の際に確認することとした。

以上の検討から仮指標は次の内容となった。

⁸⁾ 現在の実態としてはネット上でのメッセージのやり取りのほとんどがソーシャルメディアを介したものだが、「ソーシャルメディア」では詳細な定義の必要が生じてしまうため中高生向けツールとしては煩雑である。しかし例示であっても固有のサービス名を掲載することは、ネガティブなイメージを帯びる事象を扱うツールである以上憚られる。またソーシャルメディア隆盛とは言えeメールでやり取りする可能性も排除できない。そこで様々なコミュニケーション手段の利用を包含する文言として「人とメッセージのやり取りをする」とした。

図表 1 5 仮指標の内容

	つながり 依存 得点	ゲーム 依存 得点	コンテンツ 依存 得点
1. 友だちからのネット上のメッセージにはどんな時でもすぐに返信する	1 点	0 点	0 点
2. ネットでやりとりしているとき、相手からのメッセージの返信が遅いとイライラする	1 点	0 点	0 点
3. 他のことをしているときでも、ネットにどんな話題を投稿しようかということばかり考えている	2 点	0 点	0 点
4. 友だちからのメッセージが気がかりでネットを常に確認している	2 点	0 点	0 点
5. 仲間はずれにされたくないので、気が乗らないときでもネットで友だちとやり取りするのをやめられない	3 点	0 点	0 点
6. ネットをしているときが一番安心する	0 点	2 点	2 点
7. 他のことをしているときでも、ついネットのことを考えてしまう	2 点	3 点	3 点
8. 友だちと過ごすよりネットをしたいと思うことがある	2 点	3 点	3 点
9. 外で遊んだり課外活動に行ったりするよりも、家でネットを楽しみたい	0 点	3 点	3 点
10. ネット上のアプリやコンテンツ（ゲーム、音楽、スタンプなど）に課金することがよくある	2 点	3 点	2 点
11. 他にやるべきことがあってもネットをやめられない	0 点	3 点	2 点
12. ネットをしていて、気がつくとかかなりの時間がたっている	2 点	2 点	3 点
13. 現実世界の嫌なことを忘れるためにネットをしている	2 点	2 点	3 点
14. ネットをしている最中に邪魔されるとキレそうになることがある	2 点	2 点	3 点
15. 起きている間中、ずっとネットをしている	3 点	3 点	3 点
16. 誰かと話している最中でもネットをしている	2 点	2 点	2 点
17. 風呂やトイレでもネットをしている	2 点	2 点	2 点
18. 歩いている最中でもネットをしている	2 点	2 点	2 点
19. あと少しと思いながら深夜までネットをしてしまい、寝る時間が少なくなることが多い	3 点	3 点	3 点
20. ネットができないと不安で落ち着かない	2 点	2 点	2 点
21. 学校の成績が下がった原因はネットのやりすぎではないかと思う	2 点	2 点	2 点
22. よく「ネットのやりすぎ」と注意される	2 点	2 点	2 点
23. ネット以外の趣味や楽しみがない	2 点	2 点	2 点
基礎得点（各依存得点の合計）	41 点	43 点	44 点
※右の数値は全項目に該当した場合			

× × ×

つながり利用時間得点（「人とメッセージのやり取りをする時間はどのくらいですか？」） ・ 0 分 → 0 点 ・ 1 分以上 30 分未満 → 1 点 ・ 30 分以上 1 時間未満 → 2 点 ・ 1 時間以上 2 時間未満 → 3 点 ・ 2 時間以上 4 時間未満 → 4 点 ・ 4 時間以上 → 5 点	X 点	—	—
ゲーム利用時間得点（「オンラインゲームをする時間はどのくらいですか？」） ※選択肢と配点はつながりと同様	—	Y 点	—
コンテンツ利用時間得点（「動画やブログなどを見る時間はどのくらいですか？」） ※選択肢と配点はつながりと同様	—	—	Z 点

※100 点満点換算 ↓ ↓ ↓

依存度（最終結果）	●点	▲点	■点
-----------	----	----	----

7-4. 指標の検証過程（2015 年度の作業）

2015 年度は、作成した仮指標の検証作業を行った。仮指標では過去のアンケート調査データから各項目とネット利用時間の関連傾向を分析し、それを基に依存得点を配点したが、異なる調査データによる分析結果が混在していたため、同一サンプルで検証した場合にも同じような関連傾向が見られるか確認する必要があった。また、過去に調査データが無く仮の配点をした項目についても、実際の関連傾向を調査データから検証する必要があった。さらに仮指標では、関連傾向の分析に用いた指標候補から文言を改めたものもあるため、そのことによって関連傾向に違いが生じないかも確認の必要があった。

検証は次のステップを踏んで行った。

- (1) アンケート調査
- (2) 項目と利用時間の関連検証
- (3) 変更箇所の検討
- (4) 指標確定版の作成

(1) アンケート調査

配点の検証に必要な指標 23 項目とネット利用時間を質問内容に含むアンケート調査を実施した。分析結果の信頼性を少しでも高めるため、千人単位のサンプルを採取する大規模なものとし、これになるべく安価に実施するため調査会社に委託してのウェブアンケート調査の形式とした。また質問内容には、検証に必要なもの以外にも、指標のさらなる改良やネット依存の最新実態把握に必要と考えられる質問（交友関係、家庭環境、学校生活、心理傾向など）を含めた。結果、調査は次のようなものとなった。

図表 1 6 アンケート調査の概要

調査主体	日本教育情報化振興会 (JAPET&CEC)
調査対象	全国の 15～19 歳男女 ※ただし調査会社モニター会員
調査方法	調査会社によるウェブアンケート
調査時期	2015 年 7 月 24 日～同 7 月 27 日
有効票	2,947 票
質問内容	仮指標 23 項目 ネット利用時間 性別、年齢などの属性 交友関係、家庭環境、学校生活、心理傾向などの社会・心理的質問項目

(2) 項目と利用時間の関連検証

調査データを基に、仮指標で作成した 23 項目について各項目とネット利用時間の関連を検証した。検証にあたっては仮指標作成時と同様に重回帰分析を用いた。変数の概要は図表 11、分析結果は図表 12 の通りである。分析対象は高校生 (n=1,305) に限定した。

図表 1 7 変数の概要

	使用した変数	値の定義
被説明変数	各指標の回答	各指標に 4 段階で回答したものについて、「あてはまる」4 点、「ややあてはまる」3 点、「あまりあてはまらない」2 点、「あてはまらない」1 点として数値化したもの
説明変数	つながり利用時間	「人とメッセージのやり取りをする」時間(分単位の実数)
	ゲーム利用時間	「ゲームをする」時間(分単位の実数)
	コンテンツ利用時間	「動画を見る」「ホームページやブログなどの記事を見る」時間の合算(分単位の実数)
統制変数	性別	男性を 1、女性を 0 とするダミー変数
	年齢	実年齢の値

図表 1 8 重回帰分析の結果

	ネット利用時間(説明変数)		
	つながり	ゲーム	コンテンツ
1. 友だちからのネット上のメッセージにはどんな時でもすぐに返信する	.19 ***	.06	.03
2. ネットでやりとりしているとき、相手からのメッセージの返信が遅いとイライラする	.12 ***	.04	-.00
3. 他のことをしているときでも、ネットにどんな話題を投稿しようかということばかり考えている	.13 ***	.00	-.02
4. 友だちからのメッセージが気がかりでネットを常に確認している	.17 ***	.03	-.00
5. 仲間はずれにされたくないの、気が乗らないときでもネットで友だちとやり取りするのをやめられない	.10 ***	.03	-.04
6. ネットをしているときが一番安心する	-.01	.11 ***	.08 **
7. 他のことをしているときでも、ついネットのことを考えてしまう	.03	.09 **	.07 *
8. 友だちと過ごすよりネットをしたいと思うことがある	-.10 ***	.14 ***	.07 **
9. 外で遊んだり課外活動に行ったりするよりも、家でネットを楽しみたい	-.04	.16 ***	.13 ***
10. ネット上のアプリやコンテンツ(ゲーム、音楽、スタンプなど)に課金することがよくある	.03	.15 ***	-.03
11. 他にやるべきことがあってもネットをやめられない	.05	.12 ***	.13 ***
12. ネットをしていて、気がつくとかかなりの時間がたっている	.07 **	.17 ***	.13 ***
13. 現実世界の嫌なことを忘れるためにネットをしている	-.02	.11 ***	.11 ***
14. ネットをしている最中に邪魔されるとキレそうになることがある	.00	.11 ***	.02
15. 起きている間中、ずっとネットをしている	.07 *	.19 ***	.15 ***
16. 誰かと話している最中でもネットをしている	.20 ***	.11 ***	.07 **
17. 風呂やトイレでもネットをしている	.14 ***	.09 **	.07 **
18. 歩いている最中でもネットをしている	.26 ***	.09 ***	.04
19. あと少しと思いながら深夜までネットをしてしまい、寝る時間が少なくなることが多い	.08 **	.14 ***	.16 ***
20. ネットができないと不安で落ち着かない	.09 **	.11 ***	.05
21. 学校の成績が下がった原因はネットのやりすぎではないかと思う	.04	.03	.05
22. よく「ネットのやりすぎ」と注意される	.09 **	.14 ***	.09 **
23. ネット以外の趣味や楽しみがない	-.03	.06 *	-.04

※表側の被説明変数それぞれに対する、表頭の説明変数(3種類のネット利用時間)の関連の強さを表示している。

※有意水準はアスタリスクで表示しており、*** 危険率 0.1%未満、** 危険率 1%未満、* 危険率 5%未満、無印は危険率 5%以上(関連無し)をそれぞれ表す。

※数値は重回帰分析の結果出てきた標準編回帰係数である。値はすべて -1 から 1 の間をとる。

(3) 変更箇所の検討

まず指標項目とネット利用時間の関連傾向だが、仮指標の基となった分析結果と比較しておおむね同様の関連傾向が見られた。またつながり依存を識別する役割が特に大きい項目 1~5 では、項目とつながり利用時間との関連がより明瞭になるなど、期待以上の結果となった。

しかし、項目 7、21、23 は 3 種類のネット利用時間のいずれとも 0.1%水準に満たない関連しか有しておらず、項目 21 に至ってはどのネット利用時間とも無関連な結果となった。これらの項目をそのまま残すとする配点は 0~2 点となるが、配点 3 を有する他の項目と比べると、23 項目を合算した基礎得点に対するインパクトは弱いものとならざるを得ない。別の言い方をすれば、この 3 項目に該当しても該当しなくても最終的に出てくる依存度はほとんど左右されないということである。しかるに仮指標の 23 項目は簡便なチェッカーというには項目数が多すぎるきらいがあり、不要のものについてはなるべく削除することが望ましい。したがって、確定版ではこの 3 項目を除外することとした。

項目への配点方式は仮指標と同様に有意水準に応じて0～3点を与えることとした。有意水準そのものは仮指標で準拠した調査結果と異なっているため、確定版では今回の分析結果を基にした配点を振りなおした。

ネット利用時間得点については、尋ね方・配点とも仮指標で採用したものを踏襲した。

(4) 指標確定版の作成

以上の検討を経て、次の通り指標を確定した。

図表 1-9 指標確定版の内容

	つながり 依存 得点	ゲーム 依存 得点	コン テン ツ 依 存 得点
1. 友だちからのネット上のメッセージにはどんな時でもすぐに返信する	3点	0点	0点
2. ネットでやりとりしているとき、相手からのメッセージの返信が遅いとイライラする	3点	0点	0点
3. 他のことをしているときでも、ネットにどんな話題を投稿しようかということばかり考えている	3点	0点	0点
4. 友だちからのメッセージが気がかかりでネットを常に確認している	3点	0点	0点
5. 仲間はずれにされたくないのに、気が乗らないときでもネットで友だちとやり取りするのをやめられない	3点	0点	0点
6. ネットをしているときが一番安心する	0点	3点	2点
7. 友だちと過ごすよりネットをしたいと思うことがある	0点	3点	2点
8. 外で遊んだり課外活動に行ったりするよりも、家でネットを楽しみたい	0点	3点	3点
9. ネット上のアプリやコンテンツ（ゲーム、音楽、スタンプなど）に課金することがよくある	0点	3点	0点
10. 他にやるべきことがあってもネットをやめられない	0点	3点	3点
11. ネットをしていて、気がつくとなんかの時間がたっている	2点	3点	3点
12. 現実世界の嫌なことを忘れるためにネットをしている	0点	3点	3点
13. ネットをしている最中に邪魔されるとキレそうになることがある	0点	3点	0点
14. 起きている間中、ずっとネットをしている	1点	3点	3点
15. 誰かと話している最中でもネットをしている	3点	3点	2点
16. 風呂やトイレでもネットをしている	3点	2点	2点
17. 歩いている最中でもネットをしている	3点	3点	0点
18. あと少しと思いながら深夜までネットをしてしまい、寝る時間が少なくなることが多い	2点	3点	3点
19. ネットができないと不安で落ち着かない	2点	3点	0点
20. よく「ネットのやりすぎ」と注意される	2点	3点	2点
基礎得点（各依存得点の合計） ※右の数値は全項目に該当した場合	33点	44点	28点

× × ×

つながり利用時間得点（「人とメッセージのやり取りをする時間はどのくらいですか？」）			
・ 0分 → 0点			
・ 1分以上 30分未満 → 1点			
・ 30分以上 1時間未満 → 2点			
・ 1時間以上 2時間未満 → 3点			
	X点	—	—

・ 2 時間以上 4 時間未満 → 4 点			
・ 4 時間以上 → 5 点			
ゲーム利用時間得点（「オンラインゲームをする時間はどのくらいですか？」） ※選択肢と配点はつながりと同様	—	Y 点	—
コンテンツ利用時間得点（「動画やブログなどを見る時間はどのくらいですか？」） ※選択肢と配点はつながりと同様	—	—	Z 点
※100 点満点換算 ↓ ↓ ↓			
依存度（最終結果） ●点 ▲点 ■点			

7-5. 調査データを用いたシミュレーション

(1) 計算例

指標の計算方法の解説も兼ねて、まずは具体的な回答を基にした計算例を紹介する。

指標項目とネット利用時間に対し次のような回答をした人がいたとする。

図表 2 0 具体的な回答例

項目への回答（該当した項目）	
1. 友だちからのネット上のメッセージにはどんな時でもすぐに返信する	
2. ネットでやりとりしているとき、相手からのメッセージの返信が遅いとイライラする	
3. 他のことをしているときでも、ネットにどんな話題を投稿しようかということばかり考えている	
4. 友だちからのメッセージが気になりでネットを常に確認している	
5. 仲間はずれにされたくないので、気が乗らないときでもネットで友だちとやり取りするのをやめられない	
15. 誰かと話している最中でもネットをしている	
16. 風呂やトイレでもネットをしている	
17. 歩いている最中でもネットをしている	
ネット利用時間への回答	
人とメッセージのやり取りをする	5 時間
オンラインゲームをする	15 分
動画やブログなどを見る	1 時間 30 分

この回答例の場合、基礎得点と利用時間得点は図表 21 の通りになる。

図表 2 1 回答例における基礎得点と利用時間得点

基礎得点

	つながり 依存得点	ゲーム 依存得点	コンテンツ 依存得点
1. 友だちからのネット上のメッセージにはどんな時でもすぐに返信する	3 点	0 点	0 点
2. ネットでやりとりしているとき、相手からのメッセージの返信が遅いとイライラする	3 点	0 点	0 点
3. 他のことをしているときでも、ネットにどんな話題を投稿しようかということばかり考えている	3 点	0 点	0 点
4. 友だちからのメッセージが気になりでネットを常に確認している	3 点	0 点	0 点
5. 仲間はずれにされたくないので、気が乗らないときでもネットで友だちとやり取りするのをやめられない	3 点	0 点	0 点
15. 誰かと話している最中でもネットをしている	3 点	3 点	2 点
16. 風呂やトイレでもネットをしている	3 点	2 点	2 点
17. 歩いている最中でもネットをしている	3 点	3 点	0 点
基礎得点（各依存得点の合計）	24 点	8 点	4 点

利用時間得点

つながり利用時間 5 時間 ・ 0 分 → 0 点 ・ 1 分以上 30 分未満 → 1 点 ・ 30 分以上 1 時間未満 → 2 点 ・ 1 時間以上 2 時間未満 → 3 点 ・ 2 時間以上 4 時間未満 → 4 点 ・ 4 時間以上 → 5 点	5 点	—	—
ゲーム利用時間 15 分	—	1 点	—
コンテンツ利用時間 1 時間 30 分	—	—	3 点

つながり依存度は「つながり基礎得点×つながり利用時間得点」で算出する。この場合 $24 \times 5 = 120$ 点である。ゲーム、コンテンツについても同様に計算し、それぞれ 8 点、12 点が導き出される。ただしこれは中間ステップであり、最終的な依存度ではない。

図表 2 2 基礎得点と利用時間得点の掛け合わせ（中間ステップ）

	基礎得点	利用時間得点	
つながり	24 点	5 点	120 点
ゲーム	8 点	1 点	8 点
コンテンツ	4 点	3 点	12 点

先ほど算出した粗点を 100 点満点換算することで最終的な依存度を導き出す。つながり依存度の場合、基礎得点と利用時間得点がとりうる最大値は $33 \times 5 = 165$ なので、粗点を 1.65 で割る。ゲーム、コンテンツについても同様にとりうる最大値が 100 点となるようそれぞれの定数で割る。この回答例の最終的な依存度は、つながり 73 点、ゲーム 4 点、コンテンツ 9 点となる。

図表 2 2 100 点満点換算による最終的な依存度の算出

	掛け合わせた得点		最終的な依存度
つながり	120点	$\div 1.65 =$	73点
ゲーム	8点	$\div 2.20 =$	4点
コンテンツ	12点	$\div 1.40 =$	9点

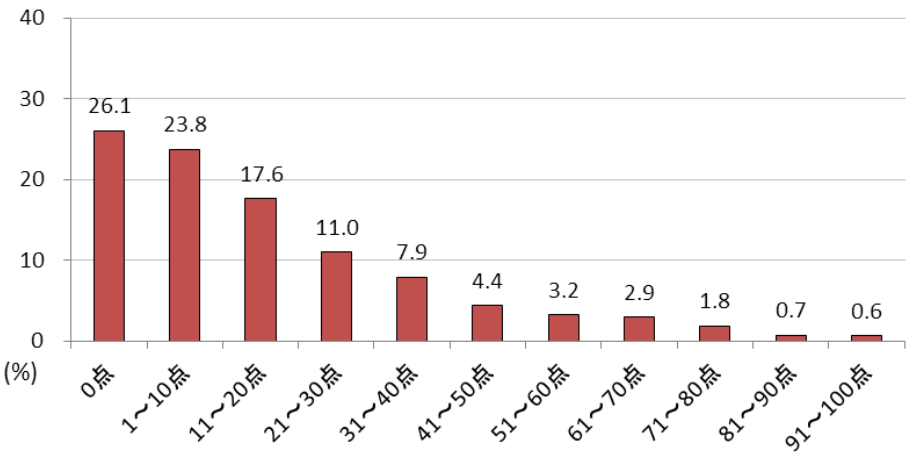
(2) 調査データを用いたシミュレーション

2015 年調査のデータを用いて、実際の高校生サンプルにおけるネット依存度の状況を算出するシミュレーションを行った。

依存度の平均点は、つながり依存度 17.6 点、ゲーム依存度 16.6 点、コンテンツ依存度 23.4 点であり、コンテンツ依存度が他の二つに比べ高得点となった。

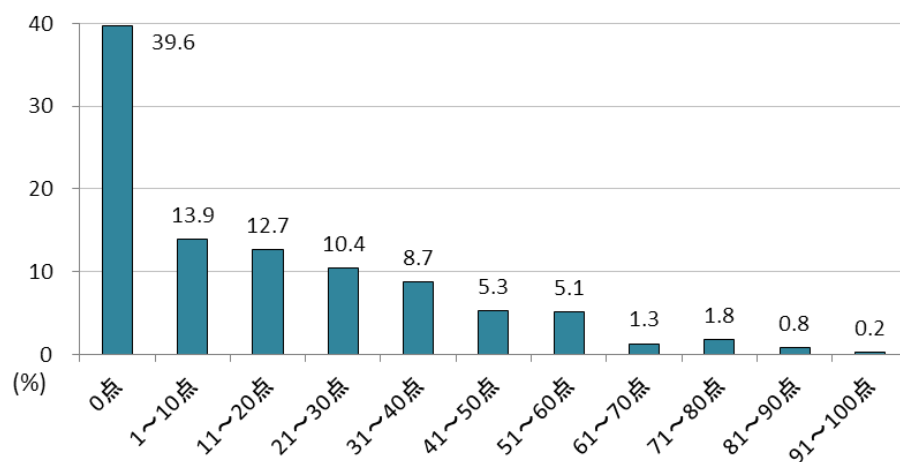
細かい分布をみると、つながり依存度では 67.5% が 20 点以下の低得点群に集中している。仮に 70 点超を高得点群とすると、これに該当したのは 3.1% であった。

図表 2 3 つながり依存度の分析（高校生サンプル、n=1,305）



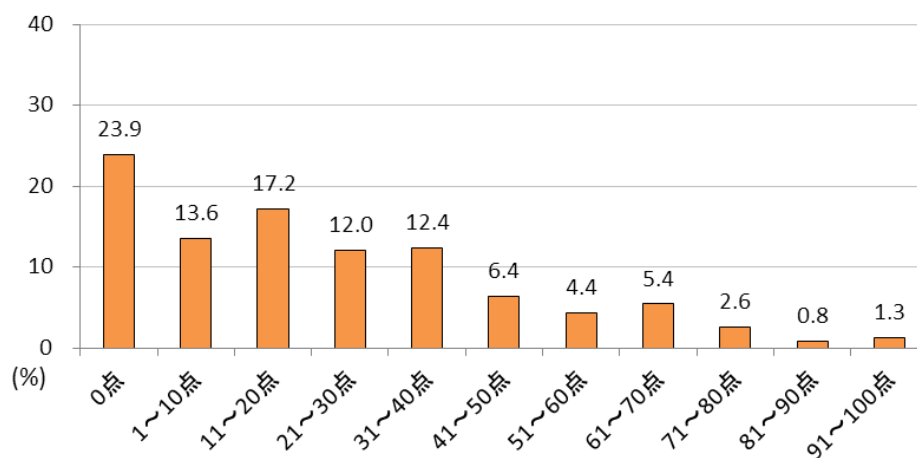
ゲーム依存度を見ると 66.2%が 20 点以下であったが、つながり依存度に比べ 0 点の割合が 13 ポイントあまり高い。70 点超の高得点群は 2.8%でつながり依存度とさほど変わらなかった。

図表 2 4 ゲーム依存度の分布（高校生サンプル、n=1,305）



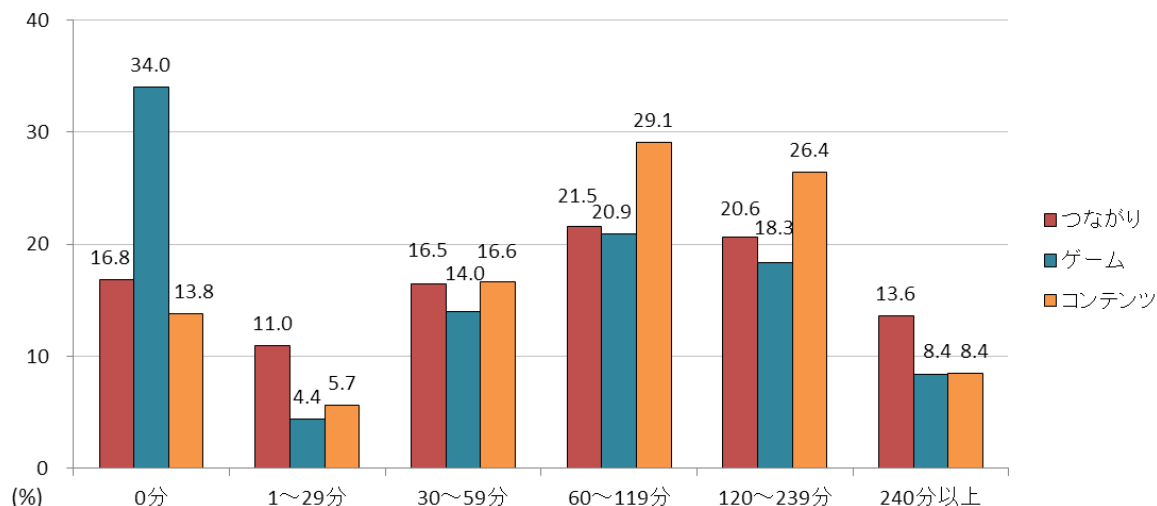
コンテンツ依存度を見ると、20 点以下の低得点群は 54.7%と、つながり依存度やゲーム依存度より少ない。70 点超の高得点群は 4.7%と他の二つに比べやや多く、21～70 点の中位群も 40.6%と多かった（つながり依存度では 29.4%、ゲーム依存度では 30.8%）。他の二つに比べ得点が全体として高めに出了ことが分かる。

図表 2 5 コンテンツ依存度の分布（高校生サンプル、n=1,305）



コンテンツ依存度が高めに出了理由の一つはネット利用時間で説明できる。図表 21 を見ると、コンテンツ関連のネット利用時間は全体として分布が長時間利用に寄っており、特に 60～119 分と 120～239 分のやや長時間に該当した割合は過半数の 55.5%に上っている（つながりは 42.1%、ゲームは 39.2%）。依存度にはネット利用時間が得点として掛け合わされているため、この違いが反映されたものと考えられる。またゲーム依存度で特に 0 点が多かった理由も、利用時間 0 分の多さで説明できる。

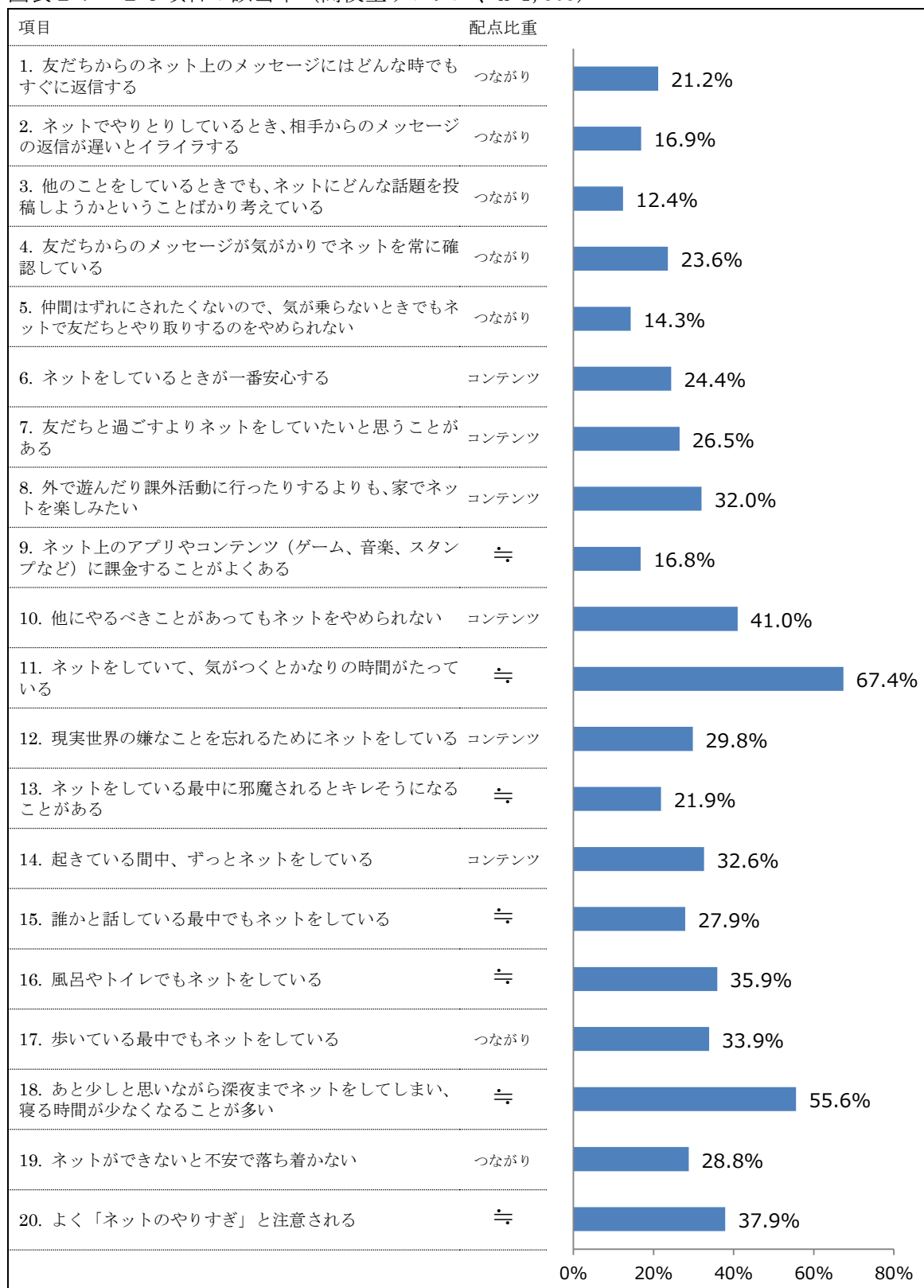
図表 2 6 ネット利用時間の分布（高校生サンプル、n=1,305）



こうなると「この指標の依存度は利用時間の長さを別の形で表しただけではないか」といった疑問が生じるかもしれない。この点については、つながり依存度と利用時間の分布を比較することで一つの反証としたい。つながりに関するネット利用時間の分布（図表 21）を見ると、ボリュームゾーンは 60～119 分、120～239 分であり、240 分以上の長時間利用もゲームやコンテンツと比べ 5 ポイント近く多い。実際の利用としては、コンテンツには劣るが、長時間に寄った分布となっている。もしこれがそのまま依存度に反映されるならば、依存度の分布も高得点に寄るはずであるが、実際には他の二つと比べて最も低得点群に集中する分布となっている。これは、実際の時間を加味してはいるが、依存度が依存項目の回答によって主に導き出されていることを示している。

そのことの傍証として、高校生サンプルにおける 20 項目への該当率を見てみよう。図表 22 ではそれぞれの項目に対し「あてはまる」「ややあてはまる」を合算したパーセンテージを表した。またゲームの配点は揃えて、それぞれの項目がつながりとコンテンツのどちらに比重を置いた配点となっているかも表記した。これを見ると、つながり寄りでは項目 17 (33.9%) や項目 19 (28.8%) の該当率が比較的高いが、配点が高い項目 1～5 は全体として見ても低い該当率にとどまっている。つながり関連の利用時間が長いにもかかわらず依存度が低めに出た原因は、そもそもつながりへの配点が多い項目への該当率が低かったために基礎得点が伸び悩んだからであると考えられる。これに対しコンテンツ寄りの項目を見ると、項目 10 (41.0%)、項目 14 (32.6%)、項目 12 (29.8%) と該当率の高い項目が多く、その他もすべて 20%を超えている。つまりコンテンツ依存度が高めに出た理由は、実際のネット利用時間が長いこともあるが、コンテンツへの配点が多い項目への該当率が高かったためであると考えられる。これらのことはとりまなおさず、依存度が主に項目への回答から導き出されていることを示している。

図表 2 7 20 項目の該当率（高校生サンプル、n=1,305）



※該当率は、各項目に対する「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を合算したもの。

※配点比重表記の意味…「つながり」：つながり依存の配点がコンテンツ依存の配点を2点以上上回るもの、「コンテンツ」：コンテンツ依存の配点がつながり依存の配点を2点以上上回るもの、「≡」：両者の差が1点以内のもの。

参考文献

- Caplan, S.E.(2002) Problematic Internet use and psychosocial well-being: development of a theory-based cognitive-behavioral measurement instrument, *Computers in Human Behavior*, 18, 553-575.
- Davis,R.A., Flett,G.L., & Besser,A.(2002) Validation of a New Scale for Measuring Problematic Internet Use: Implications for Pre-employment Screening, *CyberPsychology & Behavior*, 5(4),331-345.
- 総務省情報通信政策研究所(2014)「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する 調査」報告書.
- Young, K.S. (1998a) Internet Addiction: The Emergence of a New Clinical Disorder, *CyberPsychology and Behavior*,1(3),237-244.
- Young, K.S. (1998b) Caught in The Net: How to Recognize the Signs of Internet Addiction--and a Winning Strategy for Recovery, Wiley.(小田嶋由美子訳『インターネット中毒 まじめな警告です』,毎日新聞社,1998)

8. 成果発表会

当事業の活動内容を広く広報するために、平成27年度 JAPET&CEC 教育の情報化推進フォーラムにおいて「オンライン・ベターライフ促進 ～子どものつながり依存傾向を見つけよう～」と題して分科会Cを開催した。

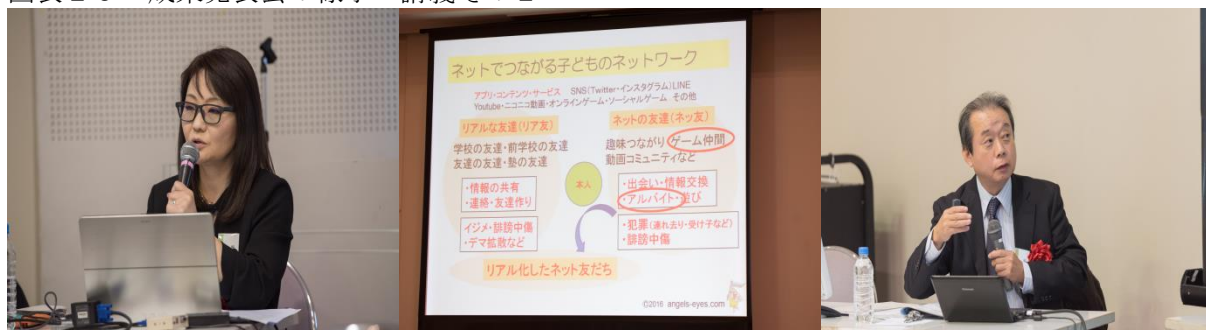
分科会の概要は以下の通りである。

- ・開催日時 平成27年3月4日 16時10分～17時20分
- ・国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟
- ・来場者数 85名
- ・プログラム 改良版つながり依存識別指標
— その原理と適用結果 —

図表28 成果発表会の様子 講義その1



図表29 成果発表会の様子 講義その2



図表30 成果発表会の様子 講義その3



9. まとめ

(1) 教育向けツールの作成と普及

実際に生徒らが使用できる形のツールを開発する必要がある。今年度までの段階でもプロトタイプに相当するものは完成しているが、ユーザーインターフェイスやデータの取り扱いといった細かな点のブラッシュアップ、授業計画や指導方法への組入れ方など、実際に教育現場で活用していただくための方策を今後検討する必要がある。

(2) 実地利用を通じた指標の妥当性の検証

今年度の検証では指標の内的な一貫性は確認できたが、指標から導き出される依存度が利用者の依存度を正しく反映できるかは、実際の利用を通じた検証が必要である。先述のシミュレーションにおいてコンテンツ依存度が高めに出た結果も、今回の調査サンプルでたまたまそうだっただけなのか、項目構成や配点の不備など構造的な要因によるものなのか検討せねばならない。

(3) さらなる簡略化と文言の再検討

中高生が気軽に利用するには20項目はなお多すぎるくらいがある。「起きている間中、ずっとネットをしている」と「風呂やトイレでもネットをしている」など相互に重複する恐れのある項目もあるため、実際の利用状況を見ながら識別に必要な項目を絞り込む必要がある。また文言についても、利用者が実際に利用した中で分かりにくかったものについては適宜改めていく必要がある。

(4) ウェブコンテンツの普及

開発した学習教材を中学・高校でパイロット的に利用する機会を設け、情報教育における普及を目指す。また問題点や教育その他における活用方法についてフィードバックを得て、さらなる改善につなげる。

指標そのものは今年度で完成となったが、今後も引き続き、ツールの作成・普及とその改良に取り組んでいきたい。

教育現場のICT安全安心対策事業 実施報告書

発行・著作 一般社団法人日本教育情報化振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル8階

TEL 03-5575-5365

FAX 03-5575-5366

<http://www.japet.or.jp/>

禁
無
断
転
載

